

後撰集新抄
三

210
41

210-41



1200901410098

Kodak Gray Scale

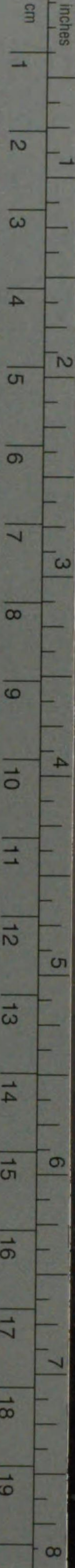
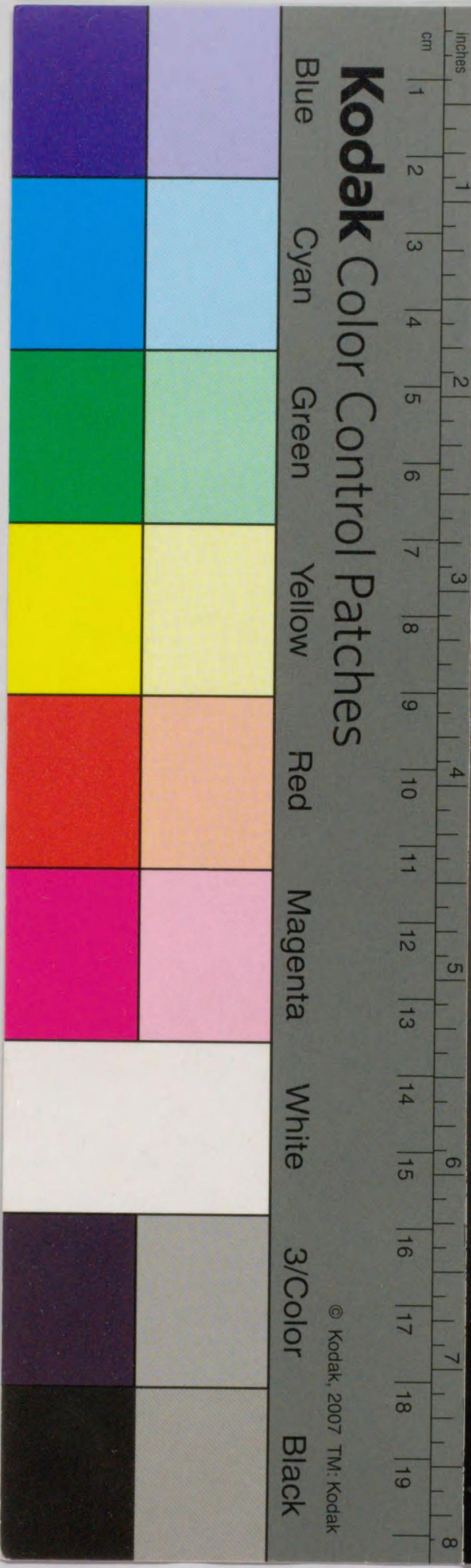


© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



後撰集新抄

三

210
41



30. 8. 26

後撰和歌集卷第七新抄

歌下

中山美行



Faint vertical text on the left side of the page, likely bleed-through from the reverse side.

Small dark marks or characters in the upper left quadrant of the right page.

後撰和歌集卷第七新抄

秋歌下

題しらす

中山美石著

44. 5. 25

よみ人しらす

藤ばかまきる人なみやたちながらしぐれの雨にぬらしそめつるぬ、異

○蘭ラナの雨にぬれて野に咲てあるを見て。かの袴ハカマは着る人の無さに。かく立たるまゝにて。しぐれの雨に令濡オシホ初めつる事にやといふなり。立タチに裁キリ初ハジメに染ソメをかけたなり。さて袴ハカマといふ名によりて。眞の袴の如くいへる事。古今コノイミ上ノ秋アキぬししらすぬ香こそにほへれ。秋の野にたがぬぎかけしふぢばかまぞもなどに同じ。藤袴は花葉ハナ莖クキともに。女郎花に似て。花は淺紫なり。香はさしもなつかしとはあらねど。いたく深き物なり。縣居

大人などの説も同じ。和名抄に蘭の字をあてられたるによりて。後世に燕尾草といふ物と思ふは非なり。打聽の細注に。萬葉新撰萬葉等には。藤袴と書て其字を出さず。和名へ日本紀延喜式等には。蘭をあらゝぎとよめり。新撰字鏡のみに。藤袴の類に用ひたり。和名抄にも。蘭萬の二蘭は食菜のあらゝぎなりしを。和名抄より。藤袴の事なるを。後々の世に。南の邊國より出せたり。から國にても。唐の代に蘭といひしは。藤袴の事なるを。後々の世に。南の邊國より出せ死し香草をもて。蘭と呼はせし。實にすぐれたる。香草なり。字鏡今の本には。藤袴を誤れり。説文に。藤は。蓋の類にて。口を香ばしくする物なり。燕尾草は。深山幽谷などに生る物なり。近き叢などにも生て。女郎花と同時に花さく物なり。燕尾草は。深山幽谷などに生る物なり。近

秋風にあひこしあへば花すゝきいづれともなくほにぞいでけるぬ、異

○あひこしあへばは。あひこあへば。といふへし。の言を加へて。意をつよくいひたるにて。古今の序に。いきといひける。いづれか歌をよまざりける。又戀一に。種しあれ。ば岩にも松はおひにけり戀をいひば。逢はざらめやもとあるなどの類なり。秋風に遇ふ程の薄は。といふに近くて。即あはぬと云もなければ。といふ言になれり。いづれともなく云々は。長きも短きも。此方なるも。彼方なるも。なべて穂に出たる事よといふなり。かくて花すゝきは。萬葉には。薄と云のみにて。只一首波奈須々伎と見えたり。此集古今に。皆花薄とよめるは。詞のうるはしきにつきてなるべし。是が穂

を。花の類として。尾花ともいへば。花薄とも云事と思ひなせし物なりと。打聽に見えたり。

くわんへいの御時。后宮の歌合に。

在原棟梁

花すゝきそよこもすれば秋風のふくかぞきくひこりぬる夜は衣なき身は、菅万

○一人寝る夜は。ことに物さびしければ。薄の聊にうちそよめくにも。すは秋風のふくかぞき。聞て。さびしさをそふる事よとなるべし。

題しらず
よみ人しらず

花すゝきほにいやすき草なればみにならんこは頼まれなくに

○薄は實ならぬ物なり。うはべの花々しき人は。まことすくなき事をいはんとて。の歌なりと。抄に見えたるが如くなるべし。されど戀の意にては。なく。たゞ大かたの世のありさまをおもひよせていへるなるべし。

秋風にさそはれわたるかりがねは雲るはるかに今日ぞきこゆる

○かねて。鴈は秋風に誘はれてわたるといふ事なるが。もはや其時節が来て。今日ぞ雲の遙に鳴聲がするよと云意なり。此歌にては。かりがねを雁之音の言に云へりと聞ゆ。いへるとは。本末の雁の名にして。萬葉十に。天雲のよそにかりがね聞しより云々といふを。鴈鳴と書き。又同卷にも。鴈之喧。鴈音。菅家萬葉に。鴈之聲者。なども書たるをも思ふべし。下に「行かへりこいもかしこも旅なれやくる秋」と云歌の所をも見合すべし。

ここのかたに思ふ人侍ける時に。

○こしのかたとは越前越後の國の方をいふなり。

貫之

秋の夜に

かりも鳴てぞわたるなる、異

ね、一本

かりも鳴てぞわたるなる、異

○抄には。かりかもなきては。鴈やらん鳴渡るとなり。是も蘇武が古事より。彼越なる人のなつかしきが。言傳はなきかとの心なりとあり。又。かりかもは。かりがねの誤なるべしと。加藤磯足いへりき。磯足は。尾張國起の人にて。鈴屋、大人のをしへ子なり。 甕麻呂云。かりかもは。即鴈の事なるべし。さるは。をしかも。あぢかも。なども。すべて其類の鳥を。かるといふならむと思ふといへり。師云。此説もさる事なれども。こは一説といふべし。此歌にては。か

りがねの誤ならんとの説。よろしくおぼゆといはれたり。また小林茂岳は。かりかもは。鴈哉なるべし。句の結の。かもの言は。此集の頃は。かなといへど。かゝる所は。かなとは。いはれざる故なり。さて。かもと。かなとは。意聊異なり。一首の意は。此秋の夜の空に。鳴聲のするは。我思ふ人の住で居る。越路より來る。鴈カヨヤマア。さすれば。かの思ふ人が。定て言つてを。爲たで。かなアラウと云なるべしといへり。此説は。抄の説に近けれど。猶委に。きなり。茂岳は。伊勢、國久居の殿人なり。

題しらず

秋のやま霧たち

霧に霧さびわけてくるかりの千世にかはらぬす、六帖こゑきこゆなり

○千世にかはらぬは。昔より今の世まで。いつとても變らぬと云意なり。こは女御入内か。又は。賀などのをりの。屏風の歌にてもあらんか。又た。何となくよめるにてもあらんか。

よみ人しらず

もの思ふ

こゝろのゆくもしらすりつ雁こそなきて秋をとつけけれ、異つれ

○物思ふとは。物思ふとての意なり。こゝろのみにて。とての意になる事。萬葉には多く

あり中にも卷十に「物思ふとカク隱居ヒツ而シテけふ見ればかすがの山は色づきにけり」とあるなどは歌の意もやゝ似たり古今上春「くるさあく」と目かれぬ物をうめの花「云々」なども暮るゝとて明るとての意なり。末句は異本に秋とある方まさるべし。

やまごにまかりけるついでに。

かりがねの鳴つるなべにからごろもたつたの山はもみぢしにけり

○此歌は萬葉十に詠黃葉とて四十一首出たる中の歌にて二句來鳴し共に來鳴しは來鳴しにつれてと云意なる事。上所々にいへるが如し。此萬葉に共にと書けるにても心得べし。末句モミヂシ黃始有とあり。人丸集といふ物には末句いろづきにけりとあり。猶萬葉の此歌の次にはニホヒかりがねのこゑきくなべにあすよりはかすがの山はモミヂシ黃始てんモミヂシ又同かりがねを聞つるなべにたかまどの野の上の草ぞ色づきにけるなといふもあり。趣意も大かた似たり。から衣はたつ田といはん料の枕詞なり。

題しらず

秋風にさはれわたるかりがねはもの思ふ人の宿をよきかなん一本

○物思ひあるをりにきけばいとゞ思ひのそふなれば。我宿をば避よとなり。古今夏

「夏山になく郭公心あらば物思ふ我に聲なきかせそ意もやゝ似たり。よくは萬葉十一旋ユキミチ曲道と書たり。直スグに行べき道を外へまはるやうの意なればなり。直道直道の反今頭歌。俗にヨケルといふに同じ。古今下春風は花のあたりはよきてふけ心づからやうつろふと見ん又此一もとはよきよといはまし帯木卷の條女に此女の家はたよきぬ道なりければ云々など。猶かたゞに見えたり。ふかふきふくふけと四種にもはたらき見えたり。ひらき見てさちまたに委まくさて又此よくよきなどのかきくげの言を濁るはひがごとにて必清むべき證は菅家萬葉に「秋の月くさむらよきすてらせばや云々」といふを斧柄ノとかりてかゝせ給ひ。又曾丹集に「春山にきこる木こりの腰にさすよきつゝきれや花のあたりは」といふを契冲法師の餘材抄に引かれたるにて明らかし。

たれきけとなくかりがねぞわが宿の花が末をすぎがてするにして一本

○抄に宿の尾花の見渡しに。鴈がねの聞ゆるに感じて詠なりとある。然るべし。四句を花が末をば抄本にはすと假字にて書き然れどもこはうれとよまんも然るべきか。此歌はやゝ古き調に聞ゆればなり。たれきけと云々といふに我に聞けとの心ならんといふ。餘情をふくみたるなり。それは三句に我宿のといひ。末句に過が

てにしてとあるにて。しか聞ゆるなり。過がては過難がたげなり。古今下春我やどにさける藤なみ立かへり過がてにのみ人の見るらんなど皆同じ。

ゆきかへりこゝもかしこも旅なれやくる秋ごごにかりくこなく

○鴈は、何所イッとても旅なればにや。毎秋來ること。空を行歸りつゝ。かりぞくこなく事よとなり。初句は。末句にかけて心得べし。朝夕日夜に。かりくこは、假カの世、假カの宿などいふかりにて。常住な。假カ初ツの意にいへるなり。次二首にいへるも同じ。又萬葉十に、ぬばたまの夜わたるかりはおぼくしくいくよをへてかおのが名をのるこもありて。かりといふ名も。もとはかれがなく聲によりておほせたるよし略解にも見えたるが如し。りすべて。おほせたる物とは思はるれど。いまだ委くは得考へず。

秋ごごに來れごかへればたのまぬを聲にたてつゝかりこのみなく

○秋は來ても。ごまらずして。春は必かへる雁なれば。來しとて誰も實には頼まぬ物を。我オシは假カに來たくと。表にあらはして。鳴ありく事よとなり。

ひたすらに我思はなくにたのれさへかりくこのみ鳴わたるらむ

○一首の意は。上の歌に同じ。抄には。假の世界ながら。我は一向にもえ思ひとらで。實

有の相に著し居るに。己さへ假々と鳴わたるよとなりとあり。かくては。菅家萬葉に「常ならぬ身をあきぬれば白雲に飛鳥さへぞかりと音をなく」とあるに似たるおもぶきなれど。猶此説はいかゞなり。二句のなくに。とありて。らんことぢめたる勢ひ。例二の句のにも。じに力ありて。い。か。又。おのれさへ。とあるにもかなはず。六帖には。ひたすらに我がきかなくに雲わけてかりぞく。と告わたるらん。とあり。

人の。かりは來にけるご申を聞て。

○此詞書は。傍なる人などの。鴈の聲を聞て。あゝはれ鴈は來にけるよと云たるほどの詞の勢ひにて。時節に感じていへる意と聞ゆるなり。鴈はと云て。ける。とあるてに。を。は。い。は。ゆる。變換なればなり。とと受るにはおほよそ。上は切る。格の辭より受るが定まりなる事。玉緒五の卷に見えたり。ひらき見て心得べし。二の卷に。

みつね

ごしごごに雲路まごはぬて來るかりは、六帖かりがねはこゝろづからや秋をしるらん

○雲霧深き北國の空は。わけも迷ふべきをまどはずして來るは。自然と。此南方へ來るべき時を知ての故にやあらん。かくも年毎に違はず來れるは。といふ意なるべし。

心づからは心からといふに近く。かれが心としてといふ意なり。つは助辭といはんが如し。手づから、身づかの詞みなかならなど。古今下春。春風は花のあたりはよきてふけ心づからやうつろふと見んなど考へ合すべし。

やまごにまかりける時。これかれごもにて。

○ともにては諸共にてと。云事と聞ゆ。陪從の意にてはあらざるべし。

よみ人しらす

天のかはかりぞとわたるさほ山のもみぢは、萬代集こずるはうべも色づきにけりる、六帖

○雁の雲路をわたるを。やがて其所の川の名と。天上なる。同名なるゆゑに思ひよせてあやとせるなるべし。とわたるも。川の縁語なり。川門、水門など。いへばなり。天川は大和郡にも河内交野にもあり。此歌によめるは詞書によるに。大和の方なるべし。夫木抄成卿吉野山花やちるらむ天の川雲のつみをあらふ白波師光朝臣花の色をひとつにめて天川くものみなりとやみよし野の山とあるなどは大和國にて。續後撰夏に爲家卿天川遠きわたりになりけりかたの、五月雨のころ新拾遺春に。津守國助宿か佐保山さぬ天の川原やうからまじ交野に花の陸なかりせばとあるなどは。河内國なり。佐保山は。大和郡添上なり。

兼輔朝臣。左近少將に侍ける時。むさしの御馬むかへに

まかりたつ日にはかにさはる事ありて。かはりに。たな
じつかさの少將にてむかへにまかりて。あふ坂より隨
身を返して。いひわくりはべりける。

藤原忠房朝臣

○近衛の中將少將ともに。左右四人づゝのよし。職原抄などに見えたり。兼輔朝臣は。延喜十三年。左近少將藏人。十七年。藏人。頭。忠房朝臣は。延喜十一年。左近少將。十八年。四位上少將と。公卿補任に見えたり。御馬迎とは。毎年八月の十五日但古は十五日なりしかども。朱雀院の御國忌にあたりて。後十六日になりたるよしなり。十七日。二十日。二十三日。二十八日に。信濃。甲斐。武藏。上野の國々より。牧馬を奉るを。近衛司の逢坂まで迎へらるゝ事なり。二十日には。武藏國。小野御馬四十四匹。秩父御馬二十四匹。立野御馬十五疋など見えたり。延喜式。江次第。年中行。事注等。諸書に委し。兼輔卿。此駒迎の使にあたりて。出立んとせらるゝ時に。俄に故障出来たれば。同官の忠房朝臣代りて。逢坂に着たる後。召具せられたる隨身を京に歸して。此歌を兼輔卿の許におくられたるなり。隨身は。ツブキとよむ花鳥餘情卷に。職によりて隨身を給はるにかぎり有て。出仕のたびによ

の常めしぐするなり其ほか時にしたがひて一人づゝめしわたすをかりの隨身といふなり假令納言の大將以下は左は左右は右の番長一人近衛五人すべて六人の隨身をゆるされて召具するなりそのうへに拜賀などの時は將監將曹府生を又一人づゝ具するを一員ともかりの隨身ともいふなりいづれも皆地下の輩なりと見えたり但隨身をかへす事は定りたる例にはあらざるべく思はる相坂に一二日と。といふなり居然れども此歌をおくらん料のみにかへさるべき事にもあらねば何か返へさるべきよし有てかへさるゝ序に歌をばものせられたるなるべし猶よく考ふべし。

秋ぎりのたち野の駒をひくごきはこゝろにのりて君ぞこひしき六帖

○秋霧のは其時節の物を以てたち野といはん料の枕詞とせられたるなり六帖にひくらん駒を秋霧の立野か。と立野は武藏國の牧の名なる事詞書の註に記せり。こまはたゞ馬の事なり必子馬ならでもこまといふは常なり漢籍に駒の字を遣へ心にのりては兼輔朝臣の事の吾が心の上にあるをいふなり萬葉二に東人の荷前の箱の荷の緒にも妹が心に乗にけるかもと有て縣居大人云卷十四東歌に白雲の絶にしいもをあせゝろと許己呂爾能里氏こゝばかなしけといふを以て見れば妹が

事の常に吾心のうへに在るをいふなり云々荷前は何れの國もあれど東國より年ごとにはじめに奉る調物を荷前といふ遠き國より奉るなればここに納て紐して馬にのせ著て上る故に荷の緒とも乗といふ言も有りといはれたり。のりては馬の縁なる事下離におくれずぞ心にのりてこがるべき波にもとめよ舟はなくともとある舟の縁にいへるに同じ但し萬葉十四の東歌にて思へば馬舟などの縁なにもいへりと思へたりだいしらず 在原元方

いそのかみふる野の草も秋はなほ色ここにこそあらたまりけれ
○古きといふ野の草も秋はやはり色のかはりて新になりたるよとなり。色ここに改まるアラタとは即露霜に色のうつろひ變る事なりそを古野といふに對へて新まるアラタとはいはれたるなり。

秋の野のにしきのごとも見ゆるかな色なき露はそめじご思ふに

○秋の野が錦の如くにも見ゆる事かな。お露は白露なればえかやうに染めはせじと思ふにいかでかくは染つらんなり六帖には末句おかしご思ふとあり。

よみ人不知

秋の野にいかなるつゆおけばかはのたきつめばちぐに、六帖の草葉の色かはるらむ

○おきつめばは置積オキツモればなり。四句本集の方にては千々のといふ事草葉へかゝりていづれの草もなべて色のかはるはいかなる露のおきつむ故ぞといふ意。六帖の方なれば千々にといふ事色かはるといふへかゝりて紅にも黄にも濃くも薄くもおのがさままゝに色の變るをあやしぶ意になるなり。此歌にては六帖の方まさりざまに聞ゆ。

いづれをかわきてしのばん秋の野にうつろはんさて色かはる草

○此歌の意抄には秋野の草花の散らんとて色かはる草々のなべてあはれなればいづれをとりわきて戀しのばんとなり。とあれども今思ふに然にはあらず。うつろふとは色づきてやゝ枯んとするをいへりと聞ゆ。うつろふといふも色かはるといふも同じ事なれどもうつろふをばあだなる方にいひ色かはるをばうつろしくめでたき方にいへるなり。一首の意は秋の野の草に色の變るとかはらざると二やうあるを色のかはる方はうつろふとて色のかはるなれば今見る所はめでたけれどあだなり又變らざる方はあだにはあらねども見たる所めでたからず然れば今いづれをかとりわきて慕シばんと云意なるべし歌のおもてにはいづれをか云

云とあるのみにて色の變らざる方は見えぬやうなれども猶下句うつろはんさて云々といへるは必色のかはらざる草に對へていへる語勢と聞ゆるなり。

紀ごものり

聲たてゝなきぞしぬべき秋霧山、六帖にこもまごはせる鹿にはあらねご

○抄には秋の霧に友まどはして鳴鹿の音に秋の感情を催されて音もなかまほしき心なるべしとあれども今思ふに秋の歌にはあらで戀雜などの歌なるべし。初二句は聲をたてゝ鳴ぬべきことちのせらる。といふ意なり。抄に、なかまほしき心と秋の山べにて霧のまぎれに友を失ひて尋ぬとて聲をあげて鳴く鹿にてはなければも。我も彼鹿の如くに聲をあげてなきぬべきことちのせらるゝよ。といへるなれば下句もたゞ聲たてゝ云々といはん料のみにはあらで思ふ人の在所アリカを失ひたるなどやうの事にたどへたる意もありげに聞れば戀雜などにてあるべしとは云なり。すべて某ならぬ。又某にはあらねどいふは其物其事のさまにいとよく似たるをいふ事なり。今世の俗にも某デハ無イガ云々といふ事常多くあり。友まどはせるは迷はしに近し。友を見失ひて尋る意なり。椎本卷に「朝霧に友迷はせる鹿の音を大かたにやはあはれともきく又拾遺冬夕されば佐保の川原の川風に友まどはせ

る千鳥なくなりなど猶多かり。

よみ人不知

たれきけごころ高きごにさをしかの長々し夜をひこりなくらん

○初句たれきけとは。我にきけとの心にて鳴くならん。と云意をふくめり。上に「誰きかりがれぞ我宿の尾花の末を過がてに」とある歌をも引合せて心得べし。二句は聲高くといふを。高砂に云かけたり。高砂は山の惣名なる事。春中巻にいへるが如し。末句は。鹿の妻を戀ふとて鳴くなれば。ひとりなくらんといへるなり。さて。我が一人寝にて。きく意をふくめたるなるべし。一首の意は。我が一人寝にて。夜の長きをわぶる頃しも。山邊の鹿の妻戀る聲高く。夜もすがら鳴くは。誰にきけとての事ならん。我に聞て。さびしさをそへよとの心にや。といふなり。

うちはへてかげごぞたのむ峯の松いろごるあきの風にうつるな

○打はへては。未長くいつまでもといはんが如し。末長く我が頼む蔭と思ふ松なれば。いつまでも。散り失する事なくもがなとなり。色どるは。樹木の紅葉する事なり。木葉のもみづるころは。又木葉の散るものなれば。其秋風などに。散失する事なかれ。といふなり。と師翁いはれたり。二句。かげごぞたのむは。夏の納涼などの蔭にて。萬

葉七に「かたをかの此むかつをに椎まかばことしの夏のかげになみんかも」とあるなどの蔭の事ならんか。又は。人の許などに遣りたる歌にて。ふくめたる意もあるにか。今はしりがたし。此歌。友則集に見えたれども。詞書などもなければ。ことに考ふべきよしもなし。されどまづは。夏の蔭の事なるべく思はるゝなり。

はつしぐれふれば山べぞたもほゆるいづれのかたかまづもみづらん

○秋のしぐれのふれば。山方の思ひやらるゝ事よ。さるは何かたが先さきに紅葉すらん。と。なり。家持集と云物に「秋風のふくにつけてぞおもほゆるさほの山べは今やもみづる」とあるも大かた似たり。もみづは。紅出を略きいふなり。詞のよとば。萬見えたり。かくてもみぢばを。紅葉と書く事。から國。唐の王維。韓愈などが詩に見ゆれば。はやくよりかしこには書けん。然るを。萬葉には多く黄葉と書。又赤葉とも有。紅葉と書たる所。只一所なるよしなど。も。考に見えたり。

いもが紐ごくごむすぶ立田山いまぞもみぢのにしきわりける

○初二句は。たつといはん料の序のみなり。趣意は。秋もやゝ深くなりぬれば。立田山の紅葉の。もはや錦と見ゆばかりになりたるよ。といふにて。ほかにかくれたる事はなし。さて此歌は。萬葉卷十に出て。二句。解登結而下句。今許曾黄葉始而有家體。と有

て是は紐を解とやがて結びて立といひかけたるなりと翁縣居はいはれつれど後撰集に「いもがひもどくとむすぶと立田山」とてのせられたればふるくはむすぶと有しかしからば解とても結ぶとてもといふ意にて明らかなり恐らくは而は等の誤ならん一二の句は立といはん爲の序のみと略解に見えたりかくて爲家卿抄云或人のいはくいもがひもははかまの腰なり女の袴のこしはゆふとてもたち解くともたてば立田とつけけたるかといへり見えたりこれにて明らかなり猶此妹云と云詞の事。靈麻呂委き論あれども事長ければ略けり。

かりなきてさむきあしたの露ならし立田の山をもみだすものは

○此歌も萬葉十に「かりがねのさむきあさけの露ならしかすがの山を令ニホハス黄ものはと有てもみちといふも紅は採出モミイダして染る物なればもみ出しの約言なりさればもみだすものはと訓べしと翁はいはれたれど猶元曆本の訓によるべしと略解にはあれども此集にももみだすとあればこれも古き訓なるべし猶萬葉八に「吾やどの芽子ハキの下葉は秋風もいまだふかねばかくぞ毛美照メルといふもあり。

見るごに秋にもなるかな立田姫もみちそむとや山もさるらむなるか、一本あるかな はてららん、六帖又友則集

○立田の山を見れば霧のたちてあるは立田姫の紅葉を染るとてさやうに山はさりのたちたるにやさても見るご見る物ごに秋のけしきにてもある事かなとなるべし抄に立田山の日々に秋のけしきを見するさまなり山もさるとは霧の立なり天霧アマギルと云詞の類なり露にも霧にも紅葉をそむればかくよめりごあるぞよろしき山はさるらんは山をさくもりてさえぎり隔つらんといはんが如しきるといふは物をさえぎりて見せぬ心なれば霧をさりとはいへりと契沖法師いはれ霧はもどくもる事なり秋霧などいふは歌詞の巧にて古言にあらずと縣居大人いはれて猶萬葉二に「秋の田の穂上爾霧相朝霞ホヘニニキラフアサガスミ云々」とあるをきらふはくもりをいひて用なり霞は其くもりの體なりなどいはれたるをも引合せておもふべし萬葉八に「打霧之雪ウチキリシユキはふりつ云々」棚霧合雪タケギラヒユキもふらぬか云々天霧之雪アマギラシユキもふらぬか云々とあるなどもみな霧合霧之など書たるをも思ひ合すべしまた涙にくれて目のくもりたる事を目もさるといへる事あり帚木卷源氏君の御文を小君が持て來たるを見られたに歌「御文みし夢をあふよありやとなげく間に目さへあはでぞころもへにけるぬる夜なければなど目も及ばぬ御かきさまも目もきりて心えぬすくせうちそへりける身を思ひつけてふし給へり又葵卷上君のむなしくなりに月ごろはい

はらからのうち、異ごち。いかなる事か侍けん

よみ人しらず

君ごわれいもせの山も秋な、異くれれば色かはりぬるものにぞありける

○抄云。いもうごと兄とにそへて。同胞バラカウの中に疎略あることの恨を述しなるべしといへり。此歌。宗子集にははらからなる人のうらめしき事ある時と詞書ありて。君と我いもせの山も云々とあるを引合せて思へば抄の説の如くなるべし。いもせは。夫妻の中にのみは限らざる事。上春にいへるが如くなればなり。然れども又下三雜に「はらからの中にいかなる事がありけん。常ならぬさまに見え侍ければ。よみ人しらず。むつまじきいもせの山の中にさへへだつる雲のはれずもあるかな」とあるも。もはら同じければ。同じ人の歌なるべく思はるゝを。此集にては。二所ともに「いかなる事か侍けん」などあるは。いさゝかやうありげにも聞ゆるなり。此事は。下三雜にも。別記にも論へり。猶引合せて見るべし。妹香山は。紀伊國なり。萬葉四に。おくれゐて戀つゝあらずは。紀の國のいもせの山にあらまし物をなど猶多し。

題しらず

元方

れそくごく色づく山秋、六帖又友則集のもみぢ葉はたくれさきだつ露やたくらん

○抄に。遍昭の「末の露もどのしづくや世中のおくれさきだつためしなるらん」を本歌にや。とあり。まことに露は。或は夕べにおき。又は夜半におき。或は朝早くきえ。又は晝にも残りなど。おくれさきだちては。かなくさだめなき物なるが。此モミヂ黄葉の。まだしきも色こきも。さまんゝあるは。かのおくれさきだつ露のおきて。染たるにや。あらんと云にて。彼僧正の歌を本歌にとられたるならんか。又は。本歌にとりてよめるには。あらで。同じ類によまれたるにてもあるべし。

立田山をこゆこて

友のり

かくばかりもみづる色うろふ、六帖のこければやしきたつ田の山といふらむ

○錦をたつといふは。たゞキル截のみをいふには。あらず。俗に云。爲立シキジる事なり。此歌なるも。かくばかり他に勝りて。紅葉の色濃きゆゑにや。錦爲立の山といふらん。といふ意なるべしと。甕麻呂いへり。

題しらず

よみ人しらず

から衣たつ田の山のもみぢ葉はものたもふ人のなみだ、一本たもごなりけり

○から衣は枕詞にて末句も縁語なり紅葉の色濃きは我が如くもの思ひあるもの紅涙にて染たる袂なるよなと云なり。かくざまに物思ふ人などいへる人は大かたに世間の人をさしていへる詞にて即我身の事をいへるなり上に秋風にさそはれわたるかりがねは物おもふ人の宿をよかなんなどすべて此歌の人の親のなりて世の人々の親の上にあてたるかへ詞皆同じ心ばへなり。

もる山をこゆこて。

貫之

○守山は近江國なり抄に比良山の麓なり一説に野州河の邊森山と同所なりとあり。今思ふに古今下秋に此貫主のもる山のほごりにてよめる白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらす色づきにけりとあるは此所の歌と同じ時のことにや古今の歌は家集には竹生島にまうづるにもる山といふ所にてとあり契沖法師云もる山は近江なり世にもり山といへり家集に云々もり山は美濃路へかゝる道にて竹生島の道にあらず。もしは同名異所の近江にあるにや。といはれたれば抄の一説とある方もすてがたし。

あしひきの山のやまもりもる山ももみぢせきする秋は來にけり

○抄に山守ありてまもる山なれど紅葉は秋の心にまかせたる心なるべしとあるが如し。もる山といふにつきて山守の守モモるといふ名の山もとなり。四句はもみぢを紅葉の名體としていへるなり。上のいみだすもみぢつるなど令爲紅葉の意なり。だいしらず

から錦たつたの山もいまよりはもみぢながらにさきはならなん

○錦をたつといふ山にはあれども今よりは紅葉のまゝにてたち散らさず常磐にてあれかしとなり。又甕麻呂は錦を仕立れば服となりて錦は失する故にしか。錦を服に裁カといふ山も猶錦の失する事なく常にあれかしといふなり。今よりはといへるに心をつくべしといへり。

からころも立田のやまのもみぢ葉ははたもの廣き、貫之集又一本もなき錦なりけり

○機ハタゴありてこそ錦は出來れ機もなくして錦をしたつるをあやしみめでたる意なり。はたものは布を織る具にて今の俗にハタゴといふに和名抄に機國語注云織リルニ設

經緯以機成縵布也。楊氏漢語抄云。高機和名多と見え。萬葉十の歌ハタモノ、フミキに機踏木もてゆき
天川うち橋わたす君がこんためなどもある物なり。

人々もろごもにはまづらをまかる道に山の紅葉をこ

れかれよみ侍けるに

忠岑

いくきごもえこそ見しられ、忠岑集の異本わかねあきやまのもみちの錦よそにたてれば

○初句聞つかぬ詞にて心得がたかりつるを我友須賀直入云。直入は伊勢國の人
人となりぬ。山城大和などの詞に衣服の着丈の事を一着ふた着といふ事あり。此
歌の初句も此着丈の幾着に用ひたるなるべし。猶此外の古歌などにも心をつけて
見ば例もあるべし。といへり。此説によりて心をつけて見るにげに其意なるべく
思はるゝは六帖に秋の山紅葉の錦いくきごもしらできりたつ空のはかなさ此歌異本
忠見集に出て末句空そはるけきとあり。又異本忠見集にいろくの紅葉のにしききりたちてのこれる
はしはいくきごか見んとあるなどみな錦といふより着丈の事にかけてたりと見ゆ
れば此歌のいく木ごも幾着にかけたる事しるし。よそ目よそは遠く離れたるを
りに遠く見れば幾木幾本ごも見えわかすと云を錦の縁にて幾着にかけたるなり。

此詞は此集にはじめて見えたる事は論なし。末句たてればは立て在ればなり。下
一雜「ごとしげししはたてれよひの間にいくらん露は出てはらはん」とあるたて
れに同じ。

題不知

よみ人も抄しらす

秋風のうちふくからに山も野もなべてにしきをに異をたりかへすかな

○おりかへすはヒルガハ翻す心なり。錦織るにそへたるべしと抄に見えたるが如し。初二
句は秋風の吹と其まゝに。といはんが如し。うちふくといへる。うちの詞勢ひありて。
末句おりかへすのおりにかけ合ひたり。

なぞ、六帖ごさらに秋かごはんからにしき立田の山のもみちしるきを

○立田山の紅葉にて秋ぞとは灼然イナシキものをいかでことさらに秋なるかとは問はん
となり。此歌末句紅葉するよをさある本は誤なるよし。玉緒に見えたり。今思ふに。
げに誤にはあるべけれどむげに理なきにもあらし。時節の意によといふ事あれば。
紅葉する節を云意と聞ゆるなり。されど六帖にもしるきをさあれば此方ぞた
しかるべき。

あだなりと我は見なくにもみぢ葉を色のかはれる秋しなれば

○秋ごとに紅にのみ染てホカ他の色にそみたる事なければ紅葉をあだなりとは我は見すとなり古今下春に花のごと世のつねならば過して昔はまたもかへり來なましとあるは年毎にかはらず咲事を常なりといひこゝは毎年色の同じきをあだならずといふにて似たるいひなしなり抄にはもみぢ葉を人は散やすくあだなりといへど我はあだなりと見ず其故は色は千秋も紅にかはらねばとなりとあるは二句の見なくにといふ詞の勢をつよく見たるにてこれもさる事なれども猶此歌にては我は見ずといふ意とせん方まさるべし某なくにと云詞たり某せずと云意にいひて終のにはてにをばのにとはいささか異にて軽く添ふる事萬葉などにも見えて古歌に例多しさて見なくにを見ずといふ意と見る時は初二句もたゞ大らかに我はあだなる物とは見ずといふのみにて抄の人はあだなりといへど千秋も云々など云までにはあらざるべし

貫之

玉かづらかづらき山のもみぢ葉はたもかけにのみ見えわたりけれ、六帖わたるかな

○初句はかけの枕詞にて葛城といはん料とせられたるなりそは萬葉二に人はよ

し思ひやむとも玉かづらかけに見えつゝわすらえぬかもとある歌の詞によりておもかけに見ゆといはんさて玉かづらと云枕詞をおき其枕詞をかづらき山へいひかけられたるが此歌の巧なりされどこは一首の意にあづかる事にはあらずさて此歌より後々玉かづらを葛城山の枕詞にも用ふる事とはなれり一首の意は葛城山の紅葉のうるはしきに深く心をそめつれば見ざる時にも常々おもかけにたつ事かなといふならんか包たるこは月日を経行く事をいへるなれば數日おもかけに見ゆる意なるべし又思ふに古今戀こえぬ間は吉野の山の櫻花人づてにのみ聞わたるかななどの如く戀歌にて思ふ人のあれども逢事はかたくたゞおもかけにのみ見えつゝいたづらに月日を経る事かなといふなるべきか伊勢物語段「人はいざ思ひやすらん玉かづらおもかけにのみいこゝ見えつゝとあるなども思ひあはすべくや葛城山は大和國なり

秋霧のたちしのみかくすかくせばもみぢ葉はたぼつかなくやみぬ、六帖て散ぬべらなり

○おぼつかなくて云々は紅葉を見まほしく思ひわたるをかくてはつひに見ざる間に散果るにてあるべき事かなとなり此歌六帖の如くなれば戀歌なるべし三句のとあるは此句までは序と聞え末句もきはめて戀と聞ゆるなり

かぐみ山をこゆこて

そせい法師

かぐみやま山かきくもりしぐるれば抄紅葉は猶もてりまさりけり、六帖あかくぞあきは見えける
○二句曇りは鏡の縁なり。末句の見えと云詞も。鏡のよせならんか。くもりといふに對へて。然れども紅葉はあかく見ゆといへるが。此歌の趣向なり。あかくはアカ赤くに明くを兼たり。

隣にすみ侍ける時。九月八日。伊勢が家の菊に綿をさせ

につかはしたりければ、又のあしたをりてかへすこて。

○菊に綿をきするは露霜にあてずして。久しからしめんとのさまなり。抄に。うつしの香をもてはやさにとにや。とあるはいかくなるべし。かくて。此詞書の意は。歌の所に合せていふを見るべし。

伊勢

かぎりなく
かぎりなく
し、異
る、六帖
名たゝるやごの露こなりなむ

つがね藤原
云正住
雅正
侍りける
時九月
八日
菊に綿
をきす
るに
おこせ
たり
をりて
あした
をりて
かへす
と

○甕麻呂云。九月九日に菊を贈るはさる事なるを。昨日贈られたる綿を着せて返すには。作意ある事なり。そはまづ。露は菊の上におく物。綿も白くて花の上にといたかせるを。露によそへなしてよめるなり。此詞書に。またのあしたをりてかへすと。とあるをりては菊なり。かへすは昨日贈たる綿をいふなり。折たる菊に。其綿を着せたるまゝにて。返し遣すなり。されば其贈たる綿の謝辭を云て返す歌なり。數しらすは。數限もしられぬほどいふ事。のばへつゝは。延へつゝなり。名たゝる宿とは。名菊を植たる我宿のと戯にいふ意なり。名たゝる宿と。自負したるが興なり。露と。ならんとは。綿に令して云なりといへり。然れば。一首の意は。此昨日贈られたる綿よ。汝は。數限も知られぬほどに。君雅正の齡を延べく。て。此我が菊に名高き宿の露となれかしといふなり。

返し

藤原雅正

露だにも名たゝるやごのきくならば花のあるじは伊勢集やいくよなるらむ

○甕麻呂云。此返歌は。露だにも限なき齡といふ宿の菊ならば。其花の主は。幾世ばかりの齡なるらん。さぞ舊き事なるべし。と云意なり。これ此集の頃の贈答の戲の例

下句に
俗言に
は俗言に
ノ主ハ
大アラ
アアラ
といふ
ととい
ふ意

なり。いくよなるらんとある。なるらんの詞に心をつくべしといへり。此説まことに
おもしろし。此集の頃の眞の面目を得たりといふべし。菊は萬葉に見えずして。今の京
のしぐれの雨に菊の花散ぞしぬべきあたらし。其香を日本後紀に見えたるを。類聚國史に
擧られ。又平城天皇の大同二年に。神泉苑にて。四位以上には。菊をかざしめ給ふ事見えて。
其時の御歌には。ふちばかまとよませ給へる事。類聚國史。又後紀に見えたれど。此四位以上
云々の事は。國史も後紀も。共に菊は蘭の字を誤傳へしなるべく。和名抄に。菊の和名を。か
らふもぎと。いへるは。葉の似たるよりいへるなるべしなどいふ事。打聽に見えたり。猶本書
どもによりて考ふべし。さて上件のおもふきを以て見れば。まづは。菊は。桓武の御代などに。
はじめて。古歌み。然聞ゆるを。漢國にては。むねとは。食物の料に。しめたり。色香を。めつる事と
明が。句の。さまなど。皆然なり。此事も。打聽にも。見ゆ。

なが月のこゝぬか。鶴のなくなりにつれば。

○なくなりにつればは。死ければといふ事なり。飛び失せたる事にはあらず。

伊勢

菊のうへにわきあるべくは。あらなくに千ごせの身をも露になす哉

○我がかねくめでこし鶴よ。菊の上におきある露ならばこそ。今日をかぎりとも
消ゆべけれ。その菊のうへにおきあるにてもあらぬに。千ごせの身を。露の如くはか
なくなす事かなといふなり。詞書に。長月九日とあげて。歌に。菊のうへにとあるを。

大かたに見すぐすべきにあらずと。薔麻呂いへり。また師翁は。菊の上の露は。千年
の齡を延る物にして。さて消やすきものなり。鶴も。千年の物なるは。同じ類なれども。
露とは。かはりて。いつまでも長壽たるべきに。菊の露の如くに。身をなして。消果たる
事かなといふにもあるべし。といはれたり。下傷にも。此同時の歌見えたり。

だいしらす
よみ人しらす

きくの花ながつきごに。さきくれば。久しきこころ。秋やしるらん

○月々の中にて。長月といふ月ごに。咲來たれる花なれば。久しくあるべきと云。菊
の心を。ばかねて。秋が知るにて。あらんと云意なり。さきくればは。咲來ればにて。昔
より。九月ごに。咲來たればと云事なり。萬葉卷六の。美濃國當耆郡。多度山。美泉。今云
瀧の歌に。いにしへ。ゆ人の言來流。老人のわかゆち。ふ水ぞ名におふたぎのせとある
などを。引合せて。ささるべし。

名にし。たへば。長月ごに。君が。ためか。きねの。菊は。にほへ。ごぞ。たもふ

○抄に。長月とて。長久の名にし。おへば。此月のけふ。菊も。君が爲に。必句へとなりとあ
る。此意なるべし。然れども。君が爲は。君が代などいふ。君の意とに。聞えざれば。人に

おくりたる歌にて其人をさすなるべし。

ほかの菊をうつしうゑて。

ふるさをわかれてさける菊の花たびながらこそにほふべらなれ

○故郷をば別離て来て。此所にて咲たるなれば。此所は旅にてはあれども。旅のまゝにて。我が咲たる所なれば。故郷にも異らず。十分にほふ事なるべしと云意なり。二句にわかれてとありて。末句にほふとあるに心をつくべし。菊の舊來生てありし所を故郷としてさて。今他所に移したれば。今ある所を旅といへるなり。拾遺秋「いづこにも草の枕をすむしはこゝを旅とも思はざらん」新古今上「女郎花野べのふる里思ひ出てやどりしむしの聲や戀しきなどの類なり。

男の久しうまでこざりければ。

なにゝ菊いろそめかへしにほふらん花もてはやす君もこなくに

○色染かへしは古今下秋「色かはる秋の菊をば一とせにふたゝびにほふ花かぞ見る」秋をおきて時こそ有けれ菊の花うつろふからに色のまさればなどある如く。露霜に色のうつろひたるさかりをいふなり。公忠集に「霜中の菊ををしむといふ事を。

おく霜に色染かへしにほひつゝ花のさかりはけふながら見んなどもあり。花もてはやすは花を賞て榮有らしむるにて。令榮の意なり。幻卷わが宿は花もてはやす人もなし何にか春の尋ね來つらんなどもおなじ。一首の意は古今下春「山ぶきはあやなゝさきそ花見んどうゑけん君がこよひこなくに」但し此古今なるは。故郷人などの類にて。菊の花は何しに其やうに。露霜に色をそへて。うつろしく艶ふ事ぞ。さやうにほひてもはれうつろしやと見はやすべき思ふが人の來もせぬのに。といふなり。かくて。此歌などは。もとより。男の許へやるべき心にてよみ出たるにはあれども。それを男に對ひてはいはずして。花に對ひての。一人ごとのさまにいひなしたるものなり。此類古歌に多くある事なり。古今春下に「さくら花散らばちらなんちらすと鏡の譯語の終に。カヤウニヨミ候ユエ御目ニカケ候以上といふ事を添へられたる。まことにおもしろき事たぐひなし。今此歌なども。さる心ばへなり。かくざまなる歌は。いづれもなすべし。心得べし。

月夜にもみちのちるを見て。

もみぢ葉のちりくる見れば長月のありあけ月のかつらなるなりけり抄又一本

○古今上「久かたの月の桂も秋はなほ紅葉すればやてりまさるらん」を本歌にてよ

めるならんか。又た。今見るさまにて思ひよせたるにてもあるべし。末句は抄本
一本などになりけり。とある方。二句の見れば。とある語勢によくかなひて。まさりざ
まに聞ゆ。

題しらず

いくちはたねればか秋の山ごとに風にみだるゝにしきなるらん

○盡もせず。山毎に亂るゝは。幾千機おりたるにしきなれば。かやうに多く亂るゝな
らんとなり。

なほざりに秋の山

野山をわけゆけばにしきをきのに、六帖
ち、異

べをこえくれは。ねにしきをきぬ人ぞなき

○なほざりには。わざこにはあらずして。といはんが如し。逍遙がてら。秋の山べを越
れば。人ごとに自然の錦を着ぬ人もなしとなり。初句。なほざりに。四句。不織とかけ
合たり。菅家萬葉。ひぐらしに秋の野山をわけくれれば。心にもあらぬ錦をぞきる。お
らぬ錦は。人の手して不織なり。萬葉十三に。山のべのいしのみ井は自然成錦をはれ
る山かも。とある自然成錦に同じ。

もみちばをわけつゝゆけばにしききて家にかへる。人や見るらむ

史記項羽本記。に。富貴不還故郷。如衣繡夜行。とあるより。故郷へは錦を着て歸るとい
ひ。又はえなき事をば。夜の錦ともいへり。貫之集に。白波のふるさと。なれやもみち葉
のにしきをきつゝ。立かへるらん。など猶多し。

貫之

打むれていざわぎも。こがかぐみ山こえて紅葉の散らん。かげ見ん

○わぎも子がは。鏡といはん料にて。かげ見んは。鏡の縁語なり。鏡山こえては。越え
ながら。といはんが如し。鏡山を越て。他の所。思ふに。此歌は。月の明らかなる夜などに
よまれたるなるべし。紅葉の歌にて。末句。かげ見んとあるを以て見るに。夜とはな
けれど。かならず夜の事と聞ゆるなり。

よみ人不知

山風のふきのまに。くもみち葉は。このもかの。もにちりぬべらなり

○ふきのまに。くは。俗に。ふくに隨て。又吹次第に。など云んが如し。このもかのも
は。此面彼面にて。此方彼方へなり。拾遺名。秋風の四方の山より。おのがじ。ふくに散
ぬる紅葉かなし。とあるにや。似たり。又思ふに。古今七條后に。伊勢御の長うた。に。お

きつ波。あれのみまさる。宮の中は「云々」秋の紅葉と。人々は、おのがちりく。わかれなば。たのむかげなく。なりはて。云々とあるなどの類にて。何か人々の別るゝをりなどの歌にや。とも思はるれど。猶た。秋の歌と見ん方然るべし。

秋の夜にあめさきこえてふりつるは風ろものはにみたるしたがふ、拾遺紅葉なりけり

○後拾遺冬。木の葉ちる宿はきくわくかたぞなきしぐれする夜も時雨せぬ夜も

立よりて見るべき人のあればこそ秋のはやしににしきしくらめ

○初句も。錦を裁縁語なり。されど。こは縁にいへるのみにて。歌の意は裁切意にかゝはるにはあらず。錦しくは紅葉の散り敷くをいへるなり。

木のもごにたらぬにしきのつもれるは雲のはやしの紅葉なりけり

○おらぬ錦は。人の手して不織をいふ事。上に「おらぬにしきを着ぬ人ぞなき」とあるに同じ。くものはやしとは。雲林院をいへりと聞ゆれば。こは彼院にてよめるか。又は其近きあたりにての歌なるべし。甕麻呂云。雲林は。人間ならぬ所の物なれば。不織錦と云るに。思ひよせたるたくみなるべし。不織錦といふも。此所にては仙人などこそさもあれ。世人の物にはあらぬ意にいへりと聞ゆ。かくて四句。雲の林は。彼院の

名をこめたる事。論なかるべしといへり。此院は。今の京の北。紫野に在て。其始は。淳和天皇の離宮にて。天長九年。こゝに行幸あり。雲林亭と名づけられたり。其後。承和十年の幸には。雲林院と紀に見えたり。さて常康親王に賜ひしを親王出家したまり。其後。承和十年。こゝを遍昭に讓給へりと。打聽に見えたり。拾芥抄に。常康親王造云々とあるは。申。よく思ふに。此歌。甕麻呂の説の如くなるべし。さて上下の句の間に。まこと。など云詞を入れて心得べくや。三句のは。文字。末句のなりけりの辭。甚力あればなり。

秋風にちるもみちばをみなべし宿にたらしきなりけり

○女郎花を。女にいひなす事は常なれば。秋の野の女郎花といふ女の織て。我宿に敷く錦なるよ。といふなり。貫之集。秋の野の萩のにしきは女郎花たちまじりつゝ。おれるなりけり。

あしひきのやまのもみちばちりにけり嵐のさきに見てまじものを

○若紫卷。宮人にゆきてかたらん山ざくら風よりさきに來ても見るべく

もみち葉のふりしく秋のやまべこそたちてくやしき錦なりけれ

○此歌の意は。後拾遺秋「から錦色見えまがふもみち葉のちる木の本はたちうかりけり」などの類にて。散やすくはかなき。紅葉の木の本を。我が立去りて悔しといふを。

山ノ紅葉
ハ。モウ
ハヤチツ
ナ。嵐ノ
フカ。先
ニ。見ヤ
ウ。アツ
タ。モ
ナ。語勢
り。ない

錦の縁にたちてと云たるにてもあるべし。裁断タテの意ならんにはをいとはいふべく。悔しとはいふべからぬさまなればなり。立去る事をたつこのみいへるは古今上思ふどちまどぬせる夜はから錦たまくをしき物にぞありけるなど猶多かればと思ひつるを。豊麻呂云。此歌にてはたちてとあるを立去る意と見んは誤なるべし。たちこのみあらばこそさも見め。たちてとあるをや。按にたちてとは錦を裁事タテにて。錦にてありしをとりて服キルモノに裁タテば。元來モトの錦の體は散り失するなり。さやうにあたら錦を散失させたるを悔しとはいふなるべし。紅葉の散亂チヂミるゝを。錦の體の散失する事によみなしたるなりといへり。此説然るべく覺ゆ。抄に紅葉の散てをしきを裁て悔しきと讀なるべしとあるも。此意と聞ゆ。

たつた川いろくれなるになりけり山の紅葉し、六帖ぞいまはちるらし

○意明らかなり。

貫之

たつ田川あきにしなれば山ちかみながるゝみづも紅葉しにけり

○三句は初句の上につして意得べし。六帖山近き所ならずはゆく水のみちせ

りこそおどろかれまし

よみ人しらず

もみち葉のながるゝあきは川ごごににしきあらふご人や見るらん

○契冲法師百人一首云。華陽國志に。蜀時濯錦於江中則鮮明也。また譙周益州志云。成都織錦成濯於江水其文分明勝於初成他水濯之不如江水也。とあるなどより。錦を洗ふどはいふよしをいはれ。童蒙抄にも。益州の青衣水の事見えたり。げにこれらの事によりていひ出たるなるべし。

たつ田がは秋は水なくあせなゝんあかぬ紅葉のながるればをし

○あせなゝんは。淺くなれかしなり。萬葉三久かたのあまのさくめがいは船のはてし高津はあせにけるかもなどもあり。今の俗にも云詞なり。

文室朝康

なみわけて見るよしもがなわたつみの底のみるめも紅葉あるやご

○わたつみは。海の事なり。秋は。世の中の本草なべてもみづれば。海底の海松イ和布も

紅出やと波をわけて見るよしもあれかしとなり。末句は散るやとにても聞えはすれど猶思ふにずるやとの誤にはあらざらんか。一首の意此世上の木の葉に比べて海底の海松和布も紅出やとゝいへるにて足りぬべし。さるを紅葉して散る事までにいはんはいさゝか行こしたるこゝちすればなり。わたつみのた文字を濁るは誤なり。かならず清むべし。冠辭考わたの底の條云。集中萬葉を云に。渡津海。方便海。綿津云。そもく。和多都美てふ語は。古事記を考るに。二神のみこを生給ふ條。生海神。名。大綿津見。神云々。わたつみの神とは。海津持の神てふ意なるを知べし。さて和多津毛。知てふ語を釋に。和多は。渡なり。津は。例の助辭なり。見は。毛知の反りなり。故に約めて美といふ。然るを萬葉の歌に。渡津海と書たるもあれど此海は。美の假字に借しのみなり。云々。又和多津美を。海名惣外に。和多津美てふ語見えず。和多津飛鳥などの御代の頃よりやいひけん云々。又古史。萬葉延喜式などまで。假字にては。和多都美と書て。和駄都字美と書る事なし。いかなる人か。わたつめけんといふ。これにて此よみも何も明らかなり。

藤原たきかぜ

この葉ちるうらに波たつ秋なればもみちと家集に花もさきまがひけり

○花とは波の花をいへり。色づきたる木葉の風にちる浦に波もたてば紅葉に波の花も混ふ事よとなるべし。風のそよよと吹來るに合せて波のひらりと立わたるよと見るほどに。木の葉のはらくと散て海上に浮ぶさま見るが如し。

よみ人しらず

わたつみの神にたむくるやま姫のぬさをぞ人は紅葉さいひける

○わたつみの神は海神なる事上にいへるが如し。海に散る紅葉を山姫の海神に手向る幣ハヒなりとして。さて人間のもみちと名づけたる物は此山姫のぬさの事なるよとなり。古今下秋立田姫たむくる神のあればこそ秋の紅葉のぬさとちるらめと似たる歌にていひなしことなり。たむけ又ぬさの事は下別離に委しくいふべし。

貫之

日ぐらしの聲もいさなくなくなるきこゆるは秋夕の夕べに六帖ぐれの一本になればなりけり

○いさなくは無暇イトナクにて俗にせわしなくといふに近し。さらでも短き秋の日の九月の末にて夕暮にさへなりたれば。蛸の聲もいさまなげにせわしく聞ゆるよな。といふなり。九月の末になりたる事は一首の上に見えざるやうなれども。秋夕ぐれの一本にさへ。と云意と聞ゆるなり。

よみ人しらず

風のたごのかぎりご秋やせめつらん吹くるごごに聲のわびしき

○初句は四句へかけて心得べし。かぎりご秋やは秋やかぎりごといはんが如し。風の音の吹來るごごにわびしきは九月も末になりて秋のかぎりごや迫りつらんと云意なり。かくさまに。句の次第をかへて見る事は。實にはよからぬ事なれども。心得がみたる上にては。もとの如く。初句より。かくて此歌吹くるごごに。琴をこめたるなり。さて其琴の方にとりては。上句風の音のかぎりごは。調子の高き至極といふ意と聞ゆ。せめつらんは。表の意にては。迫りつらんに。琴の緒をいと強くはりて。音の高き至極を弾くといふ意なるべし。拾遺名物に。松のねは秋のしらべに聞ゆなり高くせめあげて風にひくらしごあるなどもおもひ合すべし。又上秋に。松のねに風のしらべをまかせては立田姫こそ秋はひくらしごあるをも見合すべし。

もみち葉にたまれるかりのなみだには月の影こそうつるべらなれ

○雁の涙とは露の事をいへるなり。古今秋「鳴わたる雁のなみだや落つらん物思ふ宿の萩の上の露」一首の意は常に人間の袖の涙に月のうつる事をいへば雁の涙にはと思ひよせたるならんかごも思へど猶それまでにはあらず。たゞ紅葉におきたる露に月のうつりたるを見て。かれは雁の涙にて。月影のうつれるなるよといふ意ごのみ見ん方歌さまおほらかにてまさるやうなれば此後の説の方なるべく思はる。

あひしりて侍ける男の久しうごはず侍ければ九月ばかりにつかはしける。

右近

大かたの秋の空だにわびしきにももの思ひそふる君にもあるかな

○一通りに何思ひなくてだにも秋の空は物悲しくわびしきにそのうへに又かくつれなくのみし給ひて我に物思ひを添へ給ふ君にもある事かな。さてもく。といふなり。大かたのは俗に一通のと云にちかし。

だいしらず よみ人不知

わがごごく物思ひけらし白露のよをいたづらにたきあかしつ

○戀の歌にて人のつれなきなどによりて物思ひをして秋の長夜を幾夜も起明し

たるころ露を見て。彼露も我がごとく物思ひをしたるなるべし。此長き夜をおき明し／＼して。といふなるべし。いたづらにと云は露の方にはあづからず。一人起明す我方にのみかゝるなり。拾遺^戀「露だにもなからましかば秋の夜を誰とたきゐて人をまたまし」末句つゝの辭は夜を重ねて。幾夜も／＼起明す意なり。

相知て侍ける人。後々^{まかりとはす、一本}までこずなりにければ。男のたや聞て。なほまかりこへこ。申をしふこ聞て後に。まで來たりければ。

平伊望朝臣女

○後々までこずは。初は折々かよひきたりしが。後々には。かれ／＼になりて。來らざるなり。男のおや云々は。其かれ／＼になりたるさまを。彼男の親の聞つけて。それはよからぬ事ぞ。やはりかはらず往訪へなど。云ひ教ふるよしを。此作者^{伊望朝臣の女}の聞及びたる。其後に。彼男の來たれば。此歌をよみたりといふなり。みそか事の如く聞ゆるを。親のいひ教へなどせしは。いと心得がたき事のやうなれども。然にはあらず。上世よりこの集などの頃までも。今世の如く。妻をば必ず男の家によびとりて。一つ家に居りといふにはあらず。大かたは。女は即その親の家に在て。男

は。其女の許へ通ひたる事にて。もとより親々の。はからひゆるしての事なり。これ其世のさだまりたる常の事にて。さらにもみたりが。はしきわざにはあらず。委くは。源氏物語など。をよ見れば。心得らる事なり。但し。男女相知りて。云々などいふ詞書。戀の歌のかきり。は。皆此定なりといふにはあらず。中には。いとあるまじきみそか事の詞書など。は。上にいへるが如く。そといふ事なり。

秋ふかみよそにのみきく白露の誰がここの葉にかゝるなるらん

○私を厭き給ひたる事の深さに。近ごろは。よその人となりは。て給ひたるやうに聞及びつれば。今かく訪ひ給ふも。御心づから來給へるには。あらず。誰がをしへたる言葉にかゝりて。かくおはしたるにか。と云て。かの親のいさめたる事を。しらぬにもあらぬさまに。ほのめかしたるなり。

かれにける男の秋こへりけるに。つかはしける、異

昔の承香殿のあこき

こふ事の秋しもまれにきこゆるはかりにやわれを人のたのためし

○上句は。訪ふ事のまれに秋しも聞ゆるは。と云意なり。秋は。雁の來る節なる。其秋しもかく稀に訪ひ給ふは。元來我に頼に思はせ給ひたるも。一體の御心は。假初のすさびにて。おはしたるにや。となり。假を雁にそへたるは。論なし。秋に厭をも。軽く餘情に

ふくめたるなりされど此秋に脈をふくめたるは一首の餘情なり歌の表へたてて見んはわろし。

紅葉ご。いろこきさいでこそ。女のもごに遣してける、異

○色こきさいでは抄に紅の絹のきれなりとあるが如し絹布のきれをさいでといふは裂袴サキタの意なり和袴ニギタをにぎてともいへりさいでのでもにぎてのてに同じさいは裂サキの音便なり袴ハカマは布帛フシの惣名にて白たへ荒袴アラハカマ和袴ニギタなど云云みな同じ委ウヂ衣服イフモノの古着コシヨクをふるなり然ればやゝ大きなるをもいふべけれどまづは小さきと俗ソコに小切コキのみいへるさまなり枕草子マクノソコ過スにし方戀カタコイにふたあるるび染シメなどのさいでのおしへされて草子の中にありけるを見つけたる又宇治拾遺物語ウヂシヨウイモノガト佐土國サツノクニ有アに袖スベうつしにくろばみたるさいでにつくみたる物をとらせたり云云など見えたり。

源ごのふ

君こふると抄本なみだにぬるゝわか袖ご秋のもみちごいづれまされりる、異

○紅涙に染し我が袖ご秋の紅葉の色の深さはいづれかまされるぞくらべて見給

へごなり上句は彼さいでをさしていへるなり衣の切キなればなりさてかくいひやられたるさまを思ふにさいでの方紅葉よりは色の深かりつらんと聞ゆるなり此歌などのてにをはの事玉緒二の巻に右の歌又此集十一戀しきも思ひこめつあるものを人にしらす涙ナミダになり六帖ロクテウ雲もなくなきたる朝のてる日にも思はれまさる我や何なり下若菜卷カサネマキおきてゆく空もしられぬ明ぐれにいづくの露のかゝる袖なり射恒集セコトくらべみん我衣手と秋萩の花の色とはいづれまされり菅家萬葉下カサネマキをとめらがひかけのうへにふる雪は花のまがふにいづれたがへりシなどいと多く證歌を出されて云右の件の歌共トモなにいづれなどいへれば必なるれなど結ぶべき定まりなるをといはでりリと結べるはいとくめづらしき結びなりさればいづれの本にも皆みなると書る歌もまあり又一本にはり一本にはなるもありこれを思へばとあるが正しきかともいふべけれどと書る歌は猶なほすくなくてりなるが多く又菅家萬葉なるはたしかに眞字マコトにて里の字をしも書たればとあるは中々にひがごとにしてりなることうたがひなし一つの變格なり右の歌どもを考へわたすにるとも書るは皆撰集にて撰集ならぬはみなりとのみ書りこれをもて思ふに撰集はよの人のさかしらを加へて後にると改めつるものにして外の集は人の手を入れざるゆゑになかくあるは玉緒タマオをひらき見て心得べし。

題しらずよみ人不知も抄

てる月の秋しもここにさやけきはちるもみち葉をよるも見よごか

○古今秋下秋の月山べさやかにてらせるはおつる紅葉の數を見よごか

故宮の内侍に兼輔朝臣。しのびてかよはし侍ける文を

なご我身したば紅葉となりけんわなげきの枝にこそあれ

○我友古道云。兼輔朝臣の内侍の許へやり給ふ文を。此作者の中途にて取て見て。其文の端などに此歌を書そへて。さて内侍の方にやりたる事と見えたり。もとより此よみ人も内侍に心をかけて居たる事は。歌の上にてしられたり。さて兼輔朝臣の文の中。歌の詞などになげきによせたる詞ありしなるべし。さる故に。同じなげきのはよめるなるべし。さらでは兼輔朝臣をも同じなげきとはいふべくもあらず。一首の意は。兼輔朝臣も我身も。ともに君を思ひて。同じ歎の枝ながら。兼輔朝臣は。君にもしられて通ふを。いかなれば我身は。下葉の紅葉の如く。かくれたるものになりて。深き心の色を。君にもしられざるならん。といふなるべし。といへり。下葉紅葉といふ事。外に。いまだ見及ばざれども。決して右の意と聞ゆ。したばは。下葉なり。はもと濁るべし。てにをはの者にてはあらず。秋。やみなる夜。なりける夜。抄本かれこれ物がたりし侍るあひだに。かりの鳴わたり侍ければ。

源わたす朝臣抄

あかゝらば見るべきものをかりがねのいづこばかりに鳴てゆくらん

○甕麻呂云。此歌。此まゝに見ては。いかに味はひ知られぬ歌なり。故考ふるに。こは俳諧體の歌にて。かゝらば。かねは。かりを以て爲立たるなり。かゝらば。見るべき物を。といふは。秤ハカリの用なり。菅家萬葉上に。かけつれば千々のこがねも。數しりぬなぞわが戀の逢ふは。かりなき。此歌六帖秤の題にも出たり。とあるなどをも引合せて思ふべし。といへり。實に此説の如し。さて歌の表。あかゝらばは。明くあらばなり。いつこばかりには。何ナニに鳴て行らウ。いづくのほどに。といふ意なり。萬葉十。秋風に山飛こゆるかりがねの聲遠ざかる雲かくるらし。

菊の花をれるごと。人のいひ侍ければ。

○或人の家の菊花を。人のをれるを。アルジ主のいかりて。いひとがむるを。此作者の聞てよめるよしなり。いひ侍とは。其事を答めいふなりと。つかね緒にも見えたり。答めいふ事を。いふとのみいへる事は。上春中三葉にもいへり。よみ人しらず

いたづらに露にたかるゝ花かこてこゝろもしらぬ人やをりけむ

○主アルジの見はやしもせず。すておかるゝ花かと思ひて。主の賞翫せらるゝ心をもし
らぬ人の折たる事にやといふなり。露におかるゝは。たゞ露に被結レオカたるのみ。のど
いふに。主のすておく意を。軽くふくめたるなり。上中秋秋の野の露におかるゝ女郎花
はらふ人なみぬれつゝやふる。

身のなりいでぬ事を思ひなご。なげき侍アテけるころ。紀友則がも
こより。いかにぞとふらひ、抄こひたこせて侍ければ。返事に。菊の
花を折て遣しける

○身のなり出ぬは。官位など昇進せぬ事なり。今世にても。なりあがる。なりのば
る。などいふに同じ。

藤原忠行

枝も葉なくもうつろふ秋の花見菊、友則集ればはてはかけひ、抄本なくなりぬべらなり

○父祖の蔭によりて。子孫の出身する事を。蔭カガと云。此歌は。其蔭位の事を。花の枯果て。

蔭カガのなくなるにそへたるなるべしと。師翁いはれたり。一首の意は。此菊の枯行く
を見れば。終ソコには。蔭もなくなり果るならん。といふを表にて。我がかく官位も進まず
あるは。終には。衰へ果て。父祖の蔭も。かひなくなり果るならん。といふなり。又思ふ
に。我がかく昇進をもせざるにて見れば。子孫に至ては。見るかげも無く。衰へ果るな
らん。といふ意にて。蔭位の事を。ばふくめられたるにもあらんか。蔭とは。選敍令に。
凡授位者皆限年廿五以上。唯シテ以蔭出身者皆限年廿一以上。云々。凡蔭皇親者親王子。從四
位下云々。凡五位以上子。出身者一位。嫡子。從五位下云々。三位以上。蔭及孫降子。一等。云
々。などある。これ蔭位の令なり。

返し

こものり

しづくもてよはひのふてふ花なれば千代の秋にぞかけはみつ、家集しげらん

○年にてさへ齡を延ぶといふ。菊の花なれば。かげなくなるなどいふ事は。いかでか
あらん。千代の秋を経て。末長く蕃シゲるならん。と云て。父祖の蔭のなくなるなどいふ事
は。いかでかあるべき。追々に昇進ありて。榮え給ふべし。といふなり。菊の露雪もて
齡を延ぶといふ事は。風俗通等に見えたる。南陽酈縣乃甘谷の事。慈童などのもろこ

しの故事より多くいへり。
延喜御時。△に、一本秋。うためしありければ奉ける。

つらゆき

秋の月ひかりさやけみもみち葉のたつるかけさへ見えわたるかならん、一本

○古今上秋「白くもにはねうちかはしとぶかりの數さへ見ゆる秋の夜の月」

題しらず

よみ人しらず

秋風抄又異につらをはなれぬかりがねは春かへるごもかはらざらなん

○つらなれる友をはなれぬ心なり。かくの如くして春も歸れとなりと。抄にあるや然るべからん。又思ふに人の伴ひて他へ行をりに。送る人のよみたるなどにはあらじか。須磨卷に源氏君に從ひ奉て。惟光が「どこよ出て旅の空とぶかりがねもつらにおくれぬほどぞなぐさむ」といへるなどのさまに。よく似たればなり。されどこは試にいふなり。鵜鷹云。抄の説の如くにて。さて下句のかへるごもといふに。歸る友をかけて。つらをはなれぬと。友もかはらぬとを。かけ合せたるなるべしといへり。

をこの花かづらゆはんさて菊菊ありとのありごきく所に。こ
ひに遣したりければ。花にくはへてつかはしける。つけて、抄

○抄に。草花をかづらにかざりしなり。一説。童舞のかざしの花云々。さなくともにや。とあれども。たしかにも心得がたき説なり。正明云。萬葉十九に。から人の舟をうかべてあそぶてふけふぞ我せこ花かづらせよとある。花かづらに同じかるべければ。挿頭カサシの事と聞えたり。ゆふとはいと多くあつめたるものか。いぶかしといへり。猶よく考へて。追考に記すべし。

みな人にをられにけりごきくの花きみがためにぞ露も、異はわきける

○此歌の意。いさゝかたしかならぬこゝちす。抄には戀の意と見て。彼男。此女を。心あだなりといひし事あるなるべし。其心を上句に陳してよめり。皆人にをらるゝ菊とあれども。さはなき故に。君がためにと露は置しとなり。とあれども。歌の表のみにて見れば。戀の意にてはなく。たゞ聞えたるまゝに。外々の家の花は。皆人に折られたりと聞及ぶが。此方のは。君がためにとて。殘し置たり。といふ意のみの如く思はる。もし此意ならんには。詞書「花かづらゆはんさて。菊のありごきく所に。人のこひにおこ

せたりければ花にくはへてつかはしけるなどあるべく思はるゝなり。其意は、いづ方のも皆をり盡して侍れど、君が家にのみ花の有と聞侍れば、などいひおこせたるなるべし。詞書に、男の云事あるによりて、戀歌にやどは誰もおもへども、歌の意は戀のやうにも聞えず。又詞書に、菊のありとさく所にさあるも、しらぬ人にはあらねど、深くむつびしたしめるあたりとも聞えざればなり。甕磨云、末句、露はおきけるは、すこしはおきけるといふ意なるべし。我宿の物にはあれども、秋の末になりては、日々に見ることもなくてありしなるべし。たゞ皆人が折たりと、家人などのいふを聞たるが、今乞ひ給ふによりて見れば、猶君が爲にとて、少しは残りてあるによりて、まゐらするぞ、といふ意なるべし。といへり。此説然るべくおぼゆ。

題しらず

ふく風にまかするふねや秋の夜の月のうへよりけふはこぐらむ

○抄には、月の上よりけふはこぐとは水面に月のうつれる上を、舟の行なり云々。又或説に、落葉なり。月の上よりは、月の影よりとなり。とあれども、いかゞあらん。今思ふには、月の明らかなる夜、海上のさまを思ひやりて、よめりし如くも聞ゆるなり。二

句に、やといひて、末句に、らんごあるを以て見るに、上中に、秋の池の月の上こぐ舟なれば、桂の枝に棹やさはらんごあるなどのみづから舟を浮べたる意と聞ゆるとは、異なるやうなればなり。但初句のさまは、舟へに、いふ落葉の事の如くも聞ゆれども、猶いかゞあらん例の題もよみ人もしられざれば、考ふべき由もなし。師云、舟といふ物は、風にまかするものなり。風は、天空ツラを吹くものなり。月も、天空ツラにあるものなり。もとより、天空ツラをふく風をたよりの船の事なれば、今かくの如く、月の上をこぎわたるにやあらん。と云意にもあるべし。もとより、水上海上にての事なれば、月の上と云は、水にうつれる月をいふなり。土佐日記に、十七日正月なりくもれる雲なくなりて、曉月夜いともおもしろければ、舟を出してこぎゆく。此間に、雲の上も海の底も、同じ如くになん有ける。うべもむかしのをのこは、棹はうが、つ波のうへの月を、船はおそふ。みのうちのそらをといひけん、きよされにきけるなり。又ある人のよめる、浪のそこ月のうへよりこぐ舟のさをにさはるは、かつらなるべし。これを聞て、ある人、又よめる。かげ見れば、波の底なるひさかたの空、こぎわたる我ぞわびしきとあるを引合せて見るべし。といはれたり。

もみちのちりつもれる木抄ニナシのもごにて

もみち葉の抄本はちるこのもごにこまりけり過ゆく秋は一本やいづちななるらむ

○重之集もみち葉をよするあじろはおほかれと秋をこごめて見る時ぞなき

わすれにける男の紅葉を折てたくり一本侍ければ

思ひ出てこふにはあらじ秋はつる色のかぎりを見するなりけり抄本なるらん

○九月のつごもりがたの事とは前後の歌の次序にてしられたりされば紅葉を秋果る色の限といへるなり君の我を厭果給へる心を見せ給ふにてあらんといふなり

なが月のつごもりの日紅葉にひををつけてたせたり抄本

侍ければ

○花鳥餘情に水原抄云庖丁譜云水魚には紅葉をしく云々と見えたり總角卷にもあじろのひをも心よせ奉ていろくの木の葉にかきませてもてあそぶなどありかれば水魚に紅葉を添ふるは故實ある事と見えたり正明云本草に

つがね月長日ごもりに紅葉のつごもりに魚を人につけて侍りてよば

鳥をつくるは常の事なり魚をつくるはめずらしき事なり後三年の軍の繪詞

に圖ありさて水魚は山川に居るはやといふ魚の今少し肉あるものにて尾張

ふ魚の形して色はしら魚の如く白しといり尾先の方いさゝか紅なるもの

のよしなり所によりてはめづらしげもいまだ見ざる多かる麩麻呂云此詞書の紅葉は枝

にはあらで葉の事なるべし水魚をつけてとは木の枝などに鳥をつけたる如

くしたるにはあらで紅葉に副たるなるべしもごより小さき魚を鳥などの如

ちかぬがむすめ

宇治山一本の紅葉を見ずはなが月のすぎゆくひをもしらずあるべき異ぞあたまし

○宇治川の氷魚をうち山の紅葉につけたるなるべし歌の意は紅葉を見ずは秋の

暮果るをもしらずあらんをこれ給ひたればこそ時節のうつりゆくをも知れど

云て日を氷魚をかけた後拾遺冬宇治にまかりて網代のこぼれたるを見て

よめるうち川のはやくあじろはなかりけり何によりてかひをはくらさん

九月つごもりに

つらゆき

長月に、異のありあけの月は見え、六帖ありながらはかなく秋はくれぬ、一本すぎぬべらなり

○小の晦日などに廿八日の月の朝のほどにはあるなり有明の月は有ながらはかなく。有無の字を對してよめるなるべしと抄にはあれども有無を對に趣意を立られたる歌とも思はれずたゞ聞えたるまゝの歌なるべしと師翁いはれたり。一首の意は月を秋の物として月末の廿八九日のころに有明の月の残てあるを見て。彼月は猶あの如くありながら秋ははかなく過行べきなりといふ意なるべし。つごもりは晦日にはかぎらざる事上下春にもいへるが如し又晦日にても夜明がたに月のかすかに見ゆる事はあるなり。

おなじ夜、抄本

のよ、一本

みつね

いづかたに夜はなりぬらんたぼつかか、一本にやあるらん、六帖なあけぬかぎり秋ぞ、抄本は秋ぞ思はん

○今日までを九月といひ明朝よりを十月といへば此今夜の間は秋へつくにか冬へ屬つくにかとまづ疑ひていやよく思へば明朝より十月なれば今夜の明ぬ間をは猶秋ぞと思はんとなり。此秋ぞと思はんといへるに秋をふしむ意こもれり。

此歌の上句の意は古今上に「年のうちに春は來にけり一とせをこぞとやいはん」としとやいはんとあるによく似たり。

などのナルと

二句のなりぬらんと云詞は俗に夜ハドチラノ方へツク物ゾと云意にて敵ニナル味方ニナル

云詞に同じ。

六帖と異本とのにては、いづれにてもあるべし。一首の意は明らかかなり。六帖「吹くれば身にもしみける秋風をいろなき物と思ひけるかな」

秋はてゝ我身しぐれにふりぬれば言の葉さへにうつろひにけりける、異

○此歌は古今五戀に町小今はとて我身時雨に云々と出たり。我身が古きものになりつれば今は厭給ひてはやく契おき給へる詞まで違ひ侍る事よとなり。時雨はふりといひ又言の葉うつろふといはん料なりと鈴屋大人いはれ此歌は二三一四五と句をつづけて心得べしと千秋主いはれたり。されどかく句の次第をかへて心得たり。然れども詞はいさゝかの前後ありても其心ばへ必違ふ事にはあるまじき事なれば。今も必しもはぶかす。

かみな月時雨ばかりはふらずしてゆきかてにさへなごかなるらむのみ、伊勢集

○此歌は伊勢家集に男云々かへし女云々と十二首ばかりの贈答ありて。但し此贈答は仲平公などにはあらで他の男の。「かくいひつゝまゐり來んといふものからえこで初雪のふる日神な月時雨ばかりは云々とあり。是にてよく聞えたり。雪がては雨に雪のまじるをいふ。此返しに「雪まぜて見るべき物をかみな月時雨に袖の露もこそすれ」とあり。此歌は少し心得がたけれど初句「雪まぜて」とあるは此「雪がてにのみ」を

うけたるなれば。此詞。夫木一。延喜三年三月廿七日。京極御息。ゆきがてにふく春風ははな心得るにはよろし。やけれど青山なればさむからなくになどもありて和字合字などの意の詞俗言にカハヘテなど云意なり。萬葉十六に「醬酢」なるを「行難げ」と云意にかけていへるなり。時雨も雪もふればそれにつままれて行難きさまはいかでなるらんとなり。さへの詞は歌の表の時雨に雪の添はる方にいへるなり。されど家集にのみとある方まさるべく覺ゆ。

かみな月しぐれさゝもに神なびの杜の木葉はふりにこそふれ

○意かくれたる所なし。「ふりにこそふれ」は降る事のしきりなるをいふなり。上夏に「聞にきこえて」とある所に委しくいへるが如し。

女につかはしける。

たのむ木もかれはてぬればかみな月時雨にのみもぬるゝころかな袖、抄又異本

○我がよるべと頼たる君の絶果たれば今は涙に袖のみ濡るゝことかなといふを。かさやどりと頼む木陰の無くなりしより時雨に袖のぬるゝにそへていへるなり。戀歌なる事は論なし。末句は異本抄本ともに袖とある方まさるべし。

山へ入るごとて。

増基法師

かみなづきしくればかりを身にそへてしらぬ山ちにいるぞ悲しき
○今山に入んとするに世にありし時のものにて身に添ふ物とてはたゞ時雨のみ
なるぞ悲しきとなり。或人は時雨ばかりと云に。我身の舊ぬる事をよせたるにも
あるべしといへり。又思ふに時雨は山廻りすといふ物なれば山に入るといふに
よしありてかくいはれたるならんか。とも思へどいかゞあらんすべてかゝる歌な
どはあまりにこまやかに見てはかへりて一首のあはれを失ふことあるものなれ
ばなり。新古今上雑に「世をそむきなんと思ひ立てるころ月を見てよめる。寂超法師。あ
り明の月より外にたれをかは山路の友と契おくべきとあるなどをも思ひあはず
べし。二の句ばかりの詞は「見ゆばかりなる秋の夜の月曉ばかり。而已俗言にバツ
意なり。かくつかふは後世の格のごとくなれども。猶然らず古くよりかく兩様に遣
へり。古今夏石上ふるき都の時鳥聲ばかりこそ昔なりけれ。菅家萬葉。天川秋の夜量
よどまなん流るる月の影をこむべくなど猶例あり。しらぬ山路は兼てわけ入た
る事もなき。案内モ知ラ山といふ意なり。世を背て入る山をいふなり。新古今上雑「いつか我昔の

袂に露おきてしらぬ山路の月を見るべきなどもあり。

十月ばかりに大江千古がもごに。あはんごてまかりた
りけれごも侍らぬほごなればかへりまで来て尋て遣
はしける。
侍らざりける程なりければ
里、異
れりける

藤原忠房朝臣

○侍らぬほどは千古主の物へ行て家に居られざる間と云事なり。さるゆゑ
に。忠房朝臣はいたづらに歸來て。さて千古主の行て居らるる所を尋て。此歌を
やられたるなり。

もみち葉はをしき錦と見しかごも時雨ごもにふりてこそこし

○此歌の末句今の本にふりてこそと有て。詞の玉緒五の巻にもこそをしと結ぶ格
の中に出されてはあれども。今思ふに。此歌詞のうへふりてとのみ云ては。趣意聞え
がたし。ふりてくといふ事。時雨にはさる事なれども。人の歸來る事にはいふべくも
あらねばなり。契冲法師もふり出ての誤かといはれ。六帖にはふり出而曾來之てこそしとあ

るに従ふべし。ふりてと云て、ふり出、る事には、もごよりなるべくもあらねば、必出、てぞあるべき詞なり。ふり出、の詞に用あればなり。こはもごふりて、いぞとやうにありしを、てこそ、とは誤れるなるべし。かくて一首の意は、委く次の歌の下にいふべし。

返し

大江千古

もみぢ葉もしくれもつらしまれに來てかへらん人をふりやごごめぬ

○此歌末句のてにをば、言葉の玉緒、四の卷九丁に、やはの意のや、とは擧られたれども、古今一、見てのみや人にかたらん櫻花手ごごに折て家づごにせん同五、うゑし時花待遠にありし菊うつろふ秋にあはんとや見し同十一、秋の田のほのうへをてらす稻づまの光の間にも我や忘るゝなどの歌と同じくついでられたるは、同玉の卷一丁十に、○やはと擧られたる、古今一、春の夜のやみはあやなし梅の花いろこそ見えね香やはかくるゝ同八、もろごもに鳴てごごめよきりゝ、す秋の別はをしくやはあらぬなど、同じ類にて、たご意のうらへ反るゝ反語のみのや、はと見られたるさまなり。然るに此歌、後撰なるは、やはの意なる事はもごより論なく、其中にても、こ

ごに一ふしあるやはの意にて、同書に上の十一丁、○やはのつごきに、又一格、古今一櫻花はるくはされる年だにも人の心にあかれやはせぬ同三、時鳥こゑも聞えず山彦は外に鳴音をこたへやはせぬ伊勢集、秋の野に出ぬときくを花すゝきしのびに我をまねきやはせぬ後撰十一、道しらでやみやはしなぬ逢坂の關のあなたはうみといふなりなど出されて、件の歌どものやはは、一つの格にて、初學の輩の心得がたく思ふ事なり。古今の「あかれやはせぬ」は何とてあかれぬ事ぞあかれよかしといふ意、こたへやはせぬは何とてこたへぬ事ぞ答へよかしといふ意なり。其外のも、これになぞらへて心得べし。後撰なる「やみやはしなぬ」も「やみやはせぬ」と同意の辭なり。といはれたる歌どもに同じきなり。よく味ひ見てさごるべし。この「もみぢ葉はを云贈答二首の意は、忠房朝臣、千古主の他へものせられて、なきほどの家に來て、さて其、千古主の行て居らるゝ所を尋て、いひやらるゝに、もみぢ葉はをしき錦と云々とは、たご今君が家に物したるに、庭の紅葉のいと、うるはしくて、あはれ此紅葉を、ふり捨て立歸らんは、をしき錦なる事とは見つれども、君の居給はねば、せん方なさに、時雨ともろごもに、ふり出て歸侍つるよ、といふなり。ふり出てのふりの詞は、ふりすてのふりに同じく、いざとて立出るやうの心ばへなり。

故にふりて云ては詞どよのはざるなり。未摘花巻に「まへの前裁の雪を見給ふ。ふみあけたる跡もなくはるく」とあれわたりて。いみじうさびしげなるに。ふり出てゆかん事もあはれにて云々。などもあり。さてかくいひおこされたる返しなれば「もみち葉も時雨もつらし」云々は。さる事や侍けん。さては我宿なる。紅葉も時雨も。我ためにつらき心なるよ。君のまれに來給ひて。さやうにいたづらに歸給ふを。何とてふりはとどめぬ事ぞ。必ふりとどむべきにてありし物を。といひて。下の意には。今しばし。我が歸らんを待も見ずして。歸給ふ君の心もつらきなり。といふをふくめられたるなり。何とてふりとどめざりしぞ。紅葉と時雨をどがめたるが。此歌の意味ある所にて。これ彼ほかになく音をこたへやはせぬなど。全く同例のてにをはなり。よく味ひ見てささるべし。もしこれを古今五のうつろふ秋にあはんとや見しなど。と同格と見る時は。まれに來て。いたづらに歸給ふを。ふりはとどめざりしやふりとどめ侍つらんを。といふ意となりて。直に歸たる人に對ひて恨る意になるなり。歸たる人に對ひて。うらむる意も。なきにはあらねど。それは裏にふくめたるにて。歌の表は。紅葉と時雨をとがめたる意のみなり。此けちめをふくめたるにて。歌は上句もみち葉も時雨もつらし」といふ事。さらに合はず。よく思ふべし。師翁云。わが翁詞の玉緒に。思ひ及ばれざりつることども。こたび此抄詳しく考ふるにつきて。くはしくあ

げつらへる。美石が此考いとよろし。此説にしたがふべしといはれたり。
だいしらず
よみ人しらず

神な月かぎりこや思ふもみち葉のやむ時もなくよるさへぞ、異にふる

○紅葉は。十月を限の時と思ふにや。止む時もなく云々と云なるべし。順家集に。此集を撰ばる「神な月のつごりに。御題を封じて下し給へり。かみな月かぎりこや思ふもみち葉のさあり。おのく歌を奉るに。かみな月はては紅葉もいかなれや時雨とよもにふりにふるらん」とあるをも引合せて思ふべし。

ちはやぶる神垣南、異やまのさかき葉はしぐれに色さへ、一本もかはらざりけり

○神は。霜雪に色の變らぬ物なればなり。古今遊神神がきのみむろの山のさかき葉は神のみまへにしげりあひにけりなどの類なり。神の御上にかけてはいへる説もあ垣山は。大和國といへれど。いづれの山と。たしかにもしられぬさまなり。されど一所の名にては。あるべく思はるれば。猶よく考ふべし。さかきは。荒木田久老神主。萬葉考落葉。三の。説に櫛シキをいふなるべし。といはれたるぞ。古歌にも。神には多く香をよみたるにもよくかなひ。もこよりより所もある説にて。したがふべくおほゆ。其中に。神

武天皇の大御歌に伊智佐介伎未廻於朋鷄句塢云々。とあるは美者木なるべしといはれたれど今思ふになほ櫛なるべくや。櫛にも實の赤くいと美麗しきが數多くふさやかになるもあればなり。そは南天燭俗にナンテンとも云木。などの實の大きにていごめでたき物なり。こは櫛の中にての一種なり。香氣は實のなきにくらべては。いさゝかおどりざまにはあれど。なほ櫛の中の一種なる事は。疑なく見ゆるなり。櫛の落葉の全文。また其中に。いさゝか論ふべき事。などのあるは。別記にくはしく出せり。

すまぬ家△見に△人まて來て紅葉にかきていひつかはしける

枇杷左大臣

○すまぬ家には。今は絶て。我が通ひすまざる家といふことなり。此作者仲平公。太政大臣の聲に。とられ給へるをりの事なり。伊勢家集云。時のおほいまうちぎみのむこに。とられにけり。其をりにぞおやもさればよといひければ。女はづかしと思ふほどに。此男の許より人來り。こはまづ。消息などあり。しをいふこと。聞ゆ。此女の家は。五條わたりなるに來て。これ仲平公のみづから來たまひしなるべし。五條わたりなるにとあるなど。よく味ひ見るべし。かきの紅葉に。歌をなんかきつけ。る。人すまぬ云々。女心うき物から。あはれにおもほえければ。涙さへ云々。とて。ねずも

ちの紅葉につけてやりける。男いとをかしと思ひけり。女今は我をはよもとはじと思ひて。大和へくだるとて。男の許へやりける。三輪の山いかに待見ん年ふとも云々。とあり。

人すまぬの、異あれたる宿をきて見れば今ぞ木の葉紅葉の、伊勢集はにしきたりける

○久しくすまぬ家なれば。荒たる宿といへり。かく古たる里なれど。今日來て見れば。木の葉の錦なるとなり。錦着て古郷へ歸る心をふくむるにや。と抄に見えたり。げに下句は。かの大和へ下るべきけしきなどあれば。そをふくめられたるならんか。又は。我が通ひすみたるころよりは。うるはしくなりたり。と云意にてもあるべし。

かへし

いせ

なみださへしぐれにそひてふる里宿、異は紅葉の色もこさまぞまされる、一本さりけり

○見すてられしを。歎く涙の紅なるが。時雨にそひてふれば。紅葉も濃さの一しほまされりとなり。と抄にあるが如し。涙さへのさへは。二句のふると云へかゝるなり。涙の大かたならず。いと多きさまをいへるなり。涙も時雨と同じやうにふるさといふなり。又家集に。ねずもちの紅葉につけてとあるは。物思ひに不寐の意をふくめら

れたるにもあらんか。但しこは。此集にては。用なき事なり。又我友横山直磯云。此二首素性集にみづ
のをの御かどのかくれ給へるを。白河にかへさのほらへし侍しに。人すまずあれた
る宿をきて見れば。今ぞ木の葉は錦なりける。又こきもみちを見るに。をりしも時雨
すれば。かみな月時雨にそひてふる里は紅葉の色もこさまさりけり。とあり。今思ふ
に。こは素性集の方歌のもとなるを。左大臣殿のやがて伊勢御の許へはやり給へる
なるべし。末句もこのまゝにては。今やり給ふ意にすこし合はざれば。なりを奈おりに
かへ給へるなるべし。一首の意は。左大臣のやり。給ふ方にては。我が通ひすむころは。此方よりも
よろづうしろ見などもして。見ぐるしからずありしが。今はいかに荒たるならんぞ
思ひて。来て見れば。思ひしとは大に違ひて。此頃は。木葉の色づきて。美しき錦と見ゆ
る事よと云て。下旬に。伊勢の住あらしぬ意は。こもれり。さてこの住あらしぬさまに
て思へば。今は他によきうしろみのある事と見ゆる事よと云意をふくめ給へ
るなるべし。然れば。伊勢御も。又同じ素性集の古歌を。少しかへて。君は素性集の歌を
おこせ給ふゆゑに。我も其素性にて答へ侍りと云した心にて。なみださへ云々は。君
は木葉の色付て。うつくしきを御覽じて。我を疑ひ給ふが。今一段うらめしく思はれ
侍り。そは何ゆゑなれば。彼もみちの色のよきは。もと君の見すて給ふよりの事に侍

り。かく君にふる舊されたる古里なれば。我も毎日く。泣てのみ暮し侍り。其涙が。此頃の
時雨ととも降り侍るによりて。一きは紅葉の色がうつくしく。錦と見え侍るなり。
もとより我が此頃の涙は。紅涙にて侍るものと云なるべし。かく見ても。二首の歌
の意は。おほく異なら
れど。素性集の歌を用ひた
るならんといふが考なり。といへり。美石云。此説もおもしろし。二首ともに。素性集に。
詞書もありて入たるは。いかにもゆゑありげなり。然れども。素性集のみならず。古人
の家集といふもの。すべてたのみ難きのみ多ければ。ひたぶるには。従ひがたし。され
ば。此説も一説とすべき事なり。

だいしらず

よみ人しらず

冬の池

うきてぬる。興風集
夜の、六

○戀歌なり。かものうはげには。鴨の上毛になり。おく霜のまでは。例の。おく霜のき
えてといはん序なり。きえて物思ふは。心の消入るをいふなり。古今戀かきくらし
ふる白雪の下ぎえに。消て物思ふころにもあるかな。

たやのほかにあり、抄まかりて。たそくかへり△まて來、一本、△いひ、異ければ。つかはし
ける。

人のむすめのやつ△になる、一本なりける。

○つかね緒云人のむすめの云々といふ事詞書に書つゞくべしさておそくかへるといふはすべて歸る事の遅きよしにていまだ歸らぬをいふ詞なり。

かみなづきしくれふるにもくる時、一本日を君まつほごはながしごぞ思ふ

○上句は時雨のたゞ一しきりに早く降過る其時雨のふる間に暮るゝほどなる冬の短き日なれどもといふなり。

題しらす

身をわけて霜やわくらんあだ人の言の葉さへて、六帖にかれもゆくかな

○抄に我方にはかはる事もなきに彼方には枯ゆく故に身をわけてといふなるべしとあるが如し我身と人の身をわけてといふ意なり言の葉さへ枯ゆくとは契たる詞の末とげぬさまになりゆくをいふなり戀歌なる事はさらなり師云古今五に秋風は身をわけてしもふかなくに人の心のそらになるらんとあるも同じ心なり考へ合すべしといはれたりいふは身なわけてと但し遠鏡の説にては又ことごとなりそは見ん人の心にまかすべし

冬の日むさしに遣しける。

○武藏は宮仕の女房などなるべし

人しれず君につけてし我袖のけさしもなりけり、異こけずこほるらん、一本なるべし

○爲家卿抄云つけてし我袖は心をつけたるなりけさしも氷るは霜をよせたりと抄にはあれどもいかゞあらんおぼつかなし。つけてし袖とはふれてしと云とおなじ意なるべし一たび打とけてふれたる袖の涙の今朝はとけず云々と云なりと師翁いはれたり。思ふにこは女に逢たる後朝の文の中なる歌にて上句は夜べいとみそかに逢たる時に互に涙を流してぬらしたる我袖のと云ことなるをさる深く忍びたる中の事なれば逢たる事のきはやかに聞えざるやうにて君につけいへるなるべし其兩人の間にてはたしかに其事としられ他ほかより見聞てはたしかならぬやうにいふ事は戀の上に常ある事なり。下句はかのぬらしたる袖の上に猶涙をそへてかはく間なきをこは夜べの涙の氷たるなるべしといひてそれときかせたるなるべし。

題しらす

かきくらしあられふりしけ白玉をしけるにはごも人の見るべくは見蟹 菅万

○ふりしけは降しきれなり敷けにはあらず。四句は敷る庭ごもなる事。さらにいふまでもなし。一首の意は明らかなり。庭などに玉を敷く事は萬葉六「あらかじめ君來まさんとしらませば門に宿にも珠しかましを」玉敷てまたましよりはたけそかに來たるこよひしたぬしくおもほゆ同十八「ほり江にはたましかましを大ぎみの御舟こがんどかねてしりせば」玉しかず君がくいていふ言也堀江にはたましきみてつぎてかよはんなど古歌にもいと多く見えたり。玉ごは美しき石をいへるなり。必しも。瑠璃、瑪瑙などの類今も古き山陵などに。小さき白石の美しきを敷たるあり。これ當時敷たるが残れるなり。

かみな月しぐるゝごきぞみよし野の山のみ雪もふりはじめけるは、六帖

○初二句は都の空のしぐるゝ時ぞと云事なるべし。山べはここに寒さの強き物なればなり。古今上に「み山には松の雪だに消なくに都は野べの若葉つみけり」とあるは春のやゝ暖になる事をいへるにて。今の歌と反對ながら。意は通へり。又續古今に定家卿「さえくらすみやこは雪もまじらねど山のは白き夕暮の雨とよみ給へるは」

今此の歌を思ひ給へるにやあらん。

けさの嵐さむくもあるかなあし引の山かきくもり雪ぞふるらしくらし、異

○上の歌と合せ見て。意明らかなり。

黒髪のしろくなりゆく身にしあればまづ初雪をあはれこそ見る思ふ、躬恒集

○重之集「山のうへとよそに見しかどしらゆきはふりぬる人の身にも來にけり」
あられふるみ山の里のわびしきは來てたはやすくこふ人ぞなき悲しきは、六帖
れ、異
もなし、六

○たはやすくはたやすくといはんが如し。末摘花卷に「なみく」のたはやすき御ふるまひならねば「云々」などもあり。さる山里にて。冬はここに往來もかたければ。來訪ふ人もなく。いとわびしき事よと云なり。四句は異本も一本もよろしくはあらず。末句は六帖の方まさりざまなり。

ちはやぶるかみな月こそ悲しけれ我身時雨にふりぬこたもへばわびし、一本

○我身時雨に云々は時雨の降と云如くに。我身も舊くなりぬる事と思へばとなり。古今戀に「今はとて我身時雨にふりぬれば」云々ともあり。一首の意は今年も冬に

なりて一年々々過行事をなげく意なるを時雨にふりぬといはんとてかみな月
こそとはいへりと聞ゆ。初句ちはやぶると云枕詞の事につきていさゝかいふべ
き事あり序にいふべし。こは細注に記すべき事なれどもさては眞字につけたる片假字
などにはむげに小さくなりて見わき難くもあれば此所に引つ
けて記冠辭考云萬葉卷二に千磐破神會著常云卷廿に知波夜夫流神乎許等牟氣云
云猶いとこは此語は古事記に詔此葦原中國者略於此國道速振神等之多在是使何
神而將言趣また神代記に勅天稚彦略慮有殘賊強暴橫惡之神者故汝先往平之云
云この同じ事を古事記には借字にて道速云々とかき紀には理を以て殘賊云々と
書たりこの二つを相むかへてちはやぶるあらぶるかみとよみ來れるなり然れば
此辭を萬葉にはさまざまに書つれどたゞ祟はしく荒き神てふ意なるを知べし
て知波夜夫流の知は伊知を略けりその伊知は伊都と音通ひて強き勢ひをいふが
故に伊都に稜威の字を紀には書つ波夜とは古事記に伊登志和氣王といふ同じ王
を垂仁紀には膽武別命と書たり是はた古事記には假字紀は理もて書つれば訓と
義を相照し見るに膽は伊都を略けること右にいふが如し登志は疾なり波夜きな
り武きなり然れば知波夜の波夜はその武く疾に同じきぞかし俗に氣のはやき氣
のするどきなどいふ即これなりよりて心膽の疾くはげしく祟はしきをちはやぶ

るといふ事しるし且その夫流は辭にて神左備神さぶる宮び宮ぶり夷び夷夫利な
どの夫利に同じく其ありさまをいふなり云々又萬葉七に千磐破金之三崎乎過輛
吾者不忘壯鹿之須賣神こは奈良の朝の歌にて古今集にちはやぶるかもの社其後
にかしびの宮などいふが如く神のます所には此語を冠らしむる事となれるなり
上つ世は荒ぶる神と猛き人などにのみ冠らしめたるを中つ世より轉り行てよし
惡のわかちなく神てふ冠辭とのみなりたるを見えたり又玉ちはふ神といふ枕
詞ありそは同書に萬葉卷十一に靈治波布神毛吾者打棄乞云々こは神代紀に幸魂
といへるにて他の幸をなし給ふ神靈をいふこゝは其語をかみしもになしてたま
さちはふ神とはいひ下したるなりさてちはふはさちはふのさを略たる語にて卷
九に男神毛許賜女神毛千羽日給而とよめるに同じ且靈幸は善神をいふ惡神をち
はやぶるてふにむかへて是をも冠辭とすと見えたりかゝれば善神にはたまちは
ふ惡神惡神ならすともあらび
まじし事などないふ時にはちはやぶると冠らすべきことなるを古今集以後
となりては神とだに申せばちはやぶるといふ事の如くなりてたまちはふといふ
詞はありとだにしらぬやうになりたりかくなり來しまゝには神の御うへの事
をもいかさまなるものぞともしらぬやうになりもてゆくがうれたさにかくはお

どろかしたくになん。

式部卿敦實みこ△の忍びて△まかり、一本通ふ所侍けるをのちくたえ

たえになり侍たる頃ほひ、抄ければいもうこの前齋宮のみこのもこ

より△此女の許に、抄此ころもいかにぞごありければその返事に女。

○敦實親王は宇多天皇の皇子なり。さきの齊宮は柔子宮内親王と申て敦實

みこの御妹なり。忍びて通ふ所とある女は大和物語に三條右大臣のむすめ

能子と見えたり。この頃はいかにぞごは猶かはらず兄みこはおはしますや

といふ意をふくめ給へるなるべし。

しら山に雪ふりぬればあごたえていまはこしちに人もかよはず

○我身の古くなり侍ぬれば親王の跡たえて今は通はせ給はずと云なり。越路を

来し路にかけていへりと聞ゆ。今まで来し路に跡絶て人も通はずといふなるべし

うつほ物語藏ひに山となるゆきぞゆくしみおもほゆるたえてこしちの物とこそ

きけ但此歌なるは越路を不來の意にいへりと開ゆればすべし。白山は越前國なれば

よく似たるは。越路を不來の意にいへりと開ゆればすべし。白山は越前國なれば

きけ

越
こしの白山ともいへるなり。或説に加賀國ともいひ。縣居大人も今は加賀國に入たるよ
仁十四年二月戊子割越前國江沼
加賀二郡爲加賀國と見えたり。

雪の朝花をなげきて。

貫之

ふりそめてごもまつ雪はうばたまのくろ髪又、六帖我くろ髪又、六帖くる髪くろ髪又、六帖のくろ髪又、六帖かはるなりけり

○友まつ雪とは詩に待伴といふ字のあるよりいへりと契沖法師いはれたり待伴

雪とは初てふりたる雪の消す在て後々つゞきて降る雪を待ちつくる事なり袖中

抄などの説も此意なりさて此歌は彼友待雪といふ事によりて又一つの趣向をよ

まれたるなるべし。一首の意は世に友待雪といふ事のあるは雪の上の事と思ひ

つるをよく思へば年の老て我が頭に白髪ハゲの生初ハゲたるより打續きて生添ハゲひていさ

さかなりつる頭の雪の今は次第に待いで。白髪の多くなりたるよな。といふなる

べし。かくて又師の一説にはまづ友まつ雪といふは雪の降たるは興ある物なれ

ば。ごもにめではやす友をまつならひなるをましてわが身のふりそめ年のよりそ

めては若き時の如くもあらず老人の心のならひとしていさかたらふ友のまた

る心になりたれば友まつ雪といふは此わが身のふりたる頭の雪ぞといふにも
あるべしといはれたり此心に見る時は次のかへしの歌の心も又の一説のかたを
さるべきなり。ともまつ雪とよめる歌は家持集といふものに白雪の色わきがた
き梅が枝に友まつ雪ぞ消殘たるなど猶あるべし。

かへし

兼輔朝臣

黒かみのいろふり

しける
かほる、貫之集

白雪のまち出

つ

友はうごく

もあるかな、六帖
ぞありける

○友はしたしき物なれども黒髪の雪の待出る友はうごましきとなりと抄には見
えたれどもさる意とも聞えぬやうなり。師云いさふかたしかならねども試にい
はぶ頭の白くなるを雪の降初てより後々ふる友雪を呼集る如くなりとのたまへ
ども君の頭の然やうにならんはいまだほど遠き事ぞといふ意なるべしといはれ
たり。さて又一説あり。そはかけ歌に友まつ雪といふは年ふりたるわが頭の雪
ぞといひおくられたるがそのかしらの雪のまち得る友はうごくしき物ぞとな
り庭の雪は興ありてめではやすならひなれば見に来る友もあるならひなれども
かしらの雪になりて年のふりたる人の待得る友は待得がたかるべしとなり。

又

貫之

くろかみこ雪このなかのうき見れば友鏡をもつらしごぞたもふ

○袖中抄云友鏡とは我髪人の髪の白きを雪に見合せたるなり。愚按兼輔の髪の雪
の友は疎ましきといへるをうけて我髪の雪の友のうきを見れば人の頭の雪をも
つらしと思ふとなりと抄にはあれども是もたしかならぬさまなり。袖中抄の説も
元來此歌一首

の上にてい師云此歌も二説ありまづ一説例の試にいはず友達の黒き頭と我が白
髪のうきをくらべて見れば照てらし合せて見る友達までをつらく思ふと云なる
べし。又の一説には黒髪の白くなりて白雪となりたる庭などの實の白雪を
くらべて見れば友かぐみをもつらく思ふといふなりそはわが頭の白雪は鏡にて
見る物なればなり鏡にて見るにつきてわが白髪の見ゆる鏡のかげもつらしとい
ふを以前の贈答に友だちのうへをよみたれば鏡を見るにも合せ鏡にて頭を見る
事のあるに其合せかぐみを常に友かぐみといふにつけて友といふ事をいはん料
に友鏡とよめるなり友かぐみならでも頭の雪は見ゆれども友をいはん料に友か
ぐみとよめるなりこれらの説見る人の心にまかすべしといはれたり。友鏡とは
今俗にいふ合せ鏡アハの事なるべし他に例説などはいまだ見出ざれども決して合せ鏡
の事と聞ゆそれを今はてらし合せて見る友達の事にとりなされたりと見えたり。

返し

兼輔朝臣

年ごごにしらがの敷をますかぐみ見るにぞ雪のごもごしりける

○抄に貫之の友鏡といへるにつきて我も鏡を見て髪し異の雪の敷そふ事を知おどろきしとなりとあるが如し。雪の友は知ぬるといふに我も老人の友となりたる事を知たるよと云をかねていはれたるなるべし。此歌も師の一説あり又のかへしに頭の雪を友鏡して見てしかくといひおこせらるゝがそれにつけて思ふに老人のならひ年毎に白髪のの敷のまさる事なるをその白髪を鏡にうつして見れば頭の雪は庭などにふれる雪の友達なるよとなりかしらの雪を鏡にて見れば實の雪の友が出来て雪の友なるよとなりといはれたり。ます鏡は冠辭考云眞澄鏡てふ意なり云々そもく古き史などを考るに上つ代には八咫鏡日像鏡此八咫鏡日像鏡をやたの鏡に御表知坐麻蘇比乃大御鏡てふはかの日像の鏡をもて天つ日を譬いへるなれば眞澄日之鏡てふ意なりけり須美の約はしなるを曾に轉して麻曾云々といへりかくて後には卷十三萬葉を眞十見鏡卷十六に眞墨乃鏡など字を異に音を轉し書

しも猶意は右にひとし又冠辭に用るに至て言を略きて麻曾鏡といふより字をもさまざまに借てかけりと見えたり。今此歌にては白髪のの敷を益と云かけたるはいふもさらなり。

題しらす

よみ人しらす

年ふれごいろもかはらぬ松が枝にかゝれる雪をはなごこそ見れ

○色もかはらぬとは異木は春もえ初るより花さきなどすれば四時をりくかにけしき異になるを松はいつも同じきをいふなりいつも同じいろなればたゞ雪の降つみたる時を花さきて色異になれりと見るといふなり。抄に童蒙抄云松花は一千年にさくと本文ありといふを引たれども此十かへりの花の事にはあづからざる歌と思はる。

霜がれえだ枝も六帖なわびそしら雪のきえぬばかり、異かぎりは花ごこそ見れ

○冬枯の枝も雪に花と見ゆればなわびそとなくさめし心なりと抄にあるが如し。何事かゆゑあるをりの歌にてよせていへるにもあらんかなども思ひつれどよく味ひ見るにたゞ冬枯の木に雪のふりかゝれるを見て其うち見たるまゝをよめり

と見ん方。穩なるべし。菅家萬葉集に「霜がれの枝となわびそ白雪を花と雇手見れど
あかれぬ」といふもあればなり。

こほりこそ今はすらしもたきつせのたきつ音さへればたえぬなり、六帖野の山のたきつ瀬聲もきこえず

○意明らかなり。今は氷こそすらめ。といふなり。續後撰春に「氷とく春たちくらし
みよしのよしのよしの瀧のおとまさるなり」とあるをも引合せて心得べし。たぎつ
瀬のつは天津空國津神などの例には違ひて、留に通ふつなり。萬葉に「たぎち流る」と
云は、ちとりと通ひてたぎり流るなり。又たぎと濁るべし。瀧と書も、沸るの意に
て萬葉には多藝とにござるべき字を書り。と縣居大人いはれたり。

夜の夜を、六帖
夜をさむみ寢覺てきけばをしぞなくはらひもあへず霜やたくらん

○抄云。我がねざめのたへがたきに身をつみて。鴛の鳴音をも。上毛の霜をわびてに
やと。思ひやる心なり。

雪のすこしふる日。女△の許に、異につかはしける。

藤原かけもこ

かつ消てそらに、又一本もみたるとあわ雪はもの思ふ人のこころなりけり

○雪の降る片方カタヘより。つもりもあへず消るさまは。即わが思ひに消入ながら。思ひ亂
て一方ならず。うはの空なる心に。同じさまぞ。思ひ合せらるよ。となり。戀歌なる
事は。論なし。二句は。空にござる方を用ふべし。あわ雪は。和名抄云。沫雪阿和。其弱
如水沫シノアラワとあるにて。明らけし後世には。春の雪をのみいふ。如く心得ぬれど。

師氏朝臣の。かりして家の前よりまかりけるを聞て。

よみ人しらず

白雪のふりはへてこそはざらめこくるたよりをすぐさぐらなん

○抄に。ふりはへは。態ウツと。いふ意なり。こくるは。雪の解るに。來るをそへたり。わざと
こそとは。ざらめ。かく來る便宜は。過さで。立より給へかしとなり。とあり。げに。一首の
意は。此説の如し。然れども。思ふに。詞書に。狩して云々。とあれば。四句の。こくるは。もし
狩によせある詞には。あらじか。とさけび。とだち。とかへる。とぐら。とかげ。とぼ。こなど
云詞もあればなり。然れども。鳥來るといふ事は。あるべくも思はれねは。いかどあら
ん。こは。試におどろかし。おくなり。又は。外より來るたよりは。といふにてもあるべし。

初句はふりはへといはん料ながら其をりの空のさまにてもあるべし。ふりはへは抄にいへるが如く俗にわざ／＼と云意なり。古今上春日野の若菜つみにや白たへの袖ふりはへて人の行らん若紫卷紫上君のまだいとけなくて北山の僧部のに山里人にも久しうおとづれ給はざりけるを。おぼし出てふりはへ遣したりければ云々など猶多くあり。

たいしらず

思ひつゝねなくに明る冬の夜の袖のこほりはさけずもあるかな

○物思ひに、いも寐ざるに明ると云を音を泣くにかけたり。寐なくには不寐に也。袖の氷は涙をいへるなり。さて此歌は拾遺戀君戀る涙に氷る冬の夜は心さけたるいやはねらるゝなどの類にて戀の意ならんか。又は新拾遺哀わかれにし年をは霞へだつれど袖の氷はさけずぞ有けるなどいふもあればたゞよの常の物思ひのしげき意ならんか。末句さけずもあらなんさある本もあれどそはよろしからず。

あらたまの年をわたりてあるがうへにふりつむ雪のたえぬしら山

○一年の間消えずにあるがうへに冬になればいさゞふり積る雪のたえざる山なり。といふ意か。又はあるがうへにふりつむ雪の年をわたりてきえざる山ぞといふにてもあるべし。しら山は越前國の白山なり。さて此歌しら山といふに雪の白き意をかけたるにはあらず。

まこもかる堀江にうきてぬるかもこのよひの霜にいかになぶらん

○意明らかなり。まこもかるは今菰を刈ると云にはあらず。其所の物を以て枕言の如くおきたるなり。みづかべし咲野に生るあしがらに難波のほりえは浪速堀江なり。仁徳天皇の御時にほらせ給へる事紀に見えたり。

しら雲のわりある山と見えつるはふりつむ雪のきえぬなりけり

○おりゐるは下り居るにて天空より山の高嶺に下り集る意なるべし。雲の山に掛りてあるをいふなり。常に白雲の下り居る山ぞと見えしは降積れる雪の消ざるにてありけるよなと云なり。菅家萬葉冬なれば雪降積留ツツル高き嶺たつ白雲と見えわたるらん。

ふるさこのゆきは花こそふりつもるながむる我も思ひきえつゝ

○故郷の荒たる家にて雪のふる日につれくとながめ出したるさまをいへるな

ながれ行く水こほりぬる冬さへやなほうき草のあさはさだ、菅萬こごめぬ

○冬になりてウキツサ萍の枯果たるをよめり。水の流るゝ時こそさそはるべけれ。水どちたる冬さへ枯て。水草のなき心なりと抄に見えたるが如くなるべし。又試にいはゞ戀歌にて所定めずありく人などを恨たるにはあらじかとも思へどもいかゞあらん。

こゝろあておきて、六帖又一本に見ばこそわかめ白雪のいづれか花のちるにたがへる

○雪の木にふりかゝりて散るを推量に。かれは雪なりと思ひて見ばこそ。それとも見わくべけれ。たゞうち見たるさまは實に花に異ならねば見わくべくもあらずと云なり。二句見ばこそ阿かめ。とある本は誤なるべし。

あまのかは冬は浦(底)さへ水けり、菅萬(水の、異)こほり空まで水ればやいし間に、六帖にこぢたれや石まにたぎつ音だにもせす、菅萬せぬ

○こぢたれやは。こぢたればにやの意なり。此天河は河内國なるべし。銀河にてもにやと抄に見えたり。げにふと思へば。天上の銀河の如くは聞えざるやうなれども。さりさて河内國の天河などの事としては。歌の意何のあぢはひもなし。よりにてよく

たしなべて雪のふれゝばわがやごの杉松、六帖をたづねてこふ人もなし

思ふに。こはなほ天漢の事なるべし。然るは冬になれば。此國の山河など氷どぢて沸つ瀬の音も絶るなれば。ふと天漢を仰ぎ見るに。音もせざれば。さてはかの銀河も。冬は氷にとぢたるにや。たぎち流るゝ音も聞えざる事よ。と思ひよせたるなるべし。河銀は。常にも音あるものにあらざれば。いかなりなどいはいは。理に過て。風雅の心ばへを知らざる論なり。かくさまに。はかなくいふこそ。あはれも深けれ。久かたの月の桂も。秋は。なほ紅葉すれば。や照まさるべきなり。同じ心ばへなるを思ふべきなり。

○雪のいたくふりつれば。杉をも降うづみて。しるしもわかねば。訪ふ人もなしとなり。古今下雜我宿は三輪の山も戀しくは。とぶらひ來ませ。杉たてる門を本歌にていへる事は。いふまでもなし。六帖に松を。とあるは。寫誤にてもあるべし。必杉をスギといふべきさまなればなり。山里人などの心ばへなるべし。

冬の池の水にながるゝあしがものうきねながらにいくよへぬらん

○水に流るゝとは。水の上にあるさま。流にしたかふが如く見ゆれば。いふなるべし。うきねは。鴛鴨などの。水の上に寐る事なり。かくて此歌。上句は。うきねといはん序にて。うきねながらには。物思ひをしつゝ。獨寐をのみする事をいへる。戀歌にはあら

ざらんかもし戀の意ならんには二句は流るゝに泣るゝをかねたるにもあるべし。戀の歌と見る時は三句の文字はの如くといふ意なり。又あし鴨をよめる歌なればのは用語のの文字なり。あし鴨は打聽の細註に鴨は蘆邊に住物故に蘆鴨と云説はいかゞあるべきと見えたるはさる事なり。千秋翁のあしたづとは白き鶴をいへり。蘆の花の白きによれる名なり。萬葉にも白鶴とあり。といはれたるによらばあしがもく。白き鴨をいふならんか。鶴のやうにこそなけれ。鴨にもくさぐさある中にはやゝ白きもあれば。ともいふべけれど。此あしたづの説もいさゝかあかぬ所あるに似たれば。猶考ふべきなり。萬葉に葦鴨安之我母阿之賀毛など出たれば。か文字はかならず濁るべきなり。

やま^{高み、躬恒集}ちかみめづらしげなくふる雪のしろくやならん年つもりなば^{つ、異}

○抄に序歌なるべし。年つもりば我頭も白くならんとなり。とあるが如し。

松の葉^{うへ、六帖}にかゝれる雪のう^{うへ、一本}れをこそふゆの花^{うへ、一本}ごはいふべかりけれ

○う^字れは末^{ウレ}なり。されど此歌にてはう^字れといふ事。さしも用なく聞ゆれば。思ふにこ^{會禮}は。その^其の寫誤にもあるべし。一首の意はあきらかなり。

ふる雪は^{枝にもしげしたまらん、六帖}きえでもし^{枝にも葉にも}ばしごまらん花ももみちも^{たえてなきまは、六帖又異}枝^{なげれば、一本}になきころ

○きえでもは不^{キエズ}消してなり。て文字濁るべし。歌の意は明らかなり。新古今冬、此ころは花も紅葉もえだになしし。しげしなきえそ松のしらゆき。

なみだ川身なくばかりのふち^{なれど}はあれごこほりごけねば^{かげもやどらす、菅原}ゆく方もなし

○抄に或抄云。涙は深けれど。人のとけ逢はねば心ゆかず。この心なりとあり。げに戀歌にて。此説の如くなるべし。氷とけねばとは。人の心のとけざるにそへたるなるべし。行方もなしは。或抄の説の如く。心のゆく事ならんか。されど心のゆくを。たゞゆくか。たどのみいひたる例など。すこしおぼつかなければ。いかゞあらん。もしは。せ^爲ん方もなし。といふ意なるを。川水の縁にて。ゆくといへるには。あらざらんか。

ふる雪にもものたもふ我身たごらめやつもりく^{フハシヌ}てきえぬばかりぞ

○消ぬばかりは。不^{キエヌ}消にはあらず。をれぬばかり。ちりぬばかり。などの如く。きゆるばかり。ぞの意なり。と。契沖法師もいはれたるが如し。ぬはいはゆる畢の意なり。兼盛集に。物思ひてよにふる雪のわびしきはつもりく^{フハシヌ}てきえぬばかりぞ。といふもあり。

物思ふ事のつもりくつひには。我身も消果るのみぞといふなり。戀の意ならんか。又たゞ物思ひある人の歌ならんか。定めがたし。

よるならば花とや、六帖月こそ見ましわかやごのにはしろたへつるしら雪、一本にふりつしける、貫之集もる雪ふれる白雪、拾遺又一本

梅が枝一本にふりつむたける雪一本を春ちかみ目のうちつけに花かとこそ見れ、抄こそ見る

○目のうちつけには。目のさしあたり上春にはるたつと聞つるといはんが如し。上春はるたつと聞つるにはるたつと聞つるからに春日山消あへぬ雪の花と見ゆらんあるは春の残雪の事にはあれども意は通へり。

いつしかごとや、一本山のさくらもわがごとや、一本こそくごとや、一本こしのこなたに春をまつらん

○我が春を待つ如く。山の櫻もいつかく冬よりして春を待つにてあらんとなり。年のこなたには冬より待事にて。さて春近くなりたるころにいふべき詞なり。此歌を契冲法師は。清正集に「年かへりて物いはんぞ。たのめたる女に。しはすに。花さかぬ松の立枝も我ごとや年のこなたに春を待らんとあると一つなるべし」とい

れたり。いつしかとは。いつかと云意にて待遠に思ふ意なり。初句三四句などのさまげに戀の意にて。此清正集の歌などに。同じかるべく思はるれば。必戀の歌なるべし。然れどもかくさまに。三の句以下などの同じきは。いと

こしみ一本深くふりつむ雪を見る時ぞふしの高根に、六帖又貫之集こしのしらねすむこくちするにすむこくちする

○こしの白ねは。八雲御抄に。越の白山に同じとあり。白ねのねは。山の麓の事にはあらす。山の巔を云詞なり。みねも真根にて。眞は稱ていふ言なる事。縣居大人などの説。これかこれに見えたり。萬葉に。たかいふに。高嶺。高峯などかけるにて。さとるべし。年ふかくは。冬深く

年くれて春あけがたになりぬとや、異ればはなすのためしふれる、六帖にまが雪かもし、一本ふしら雪

○抄云。花のためしは。様の字なり。花の様體にまがふと云なりといへり。今思ふに。様の字なりといへるは。心ゆかぬ事ながらげに。意は俗に様體ヤウタイといふに似たるさまに聞ゆ。然れども。此詞かくさまにつかひたる例。いまだ得見出ざれば。たしかにはいひがたし。又。春明方といふも。めづらしき遣ひさかまなれど。よく思ふに。すべて年にて。も夜にても。其終ハテの所に至て。彼方此方の界サカにていふ時は。何方よりも云詞とおぼしき

なり。時にはへば。常に。夜の明方といひて。朝の明方とはいはざれども。まさしく今明んとする方といはんが。猶。後にも此類例など見出で。別記又は追考にいふべし。又別記にも此註釋の考など。後々に見聞及びたらん人々

春ちかくふるしらゆきは小ぐら山みねにぞ花のさかりなりける一本

○小倉山は山城なり。一首の意は明らけし。春の近くなりたるによりて。花の盛と見ゆるよしなり。上の春あけ方になりぬればと云をも見合せて心得べし。

冬の池にすむにほごりのつれもなくしたにかよはん人にしらすな氷の下を我はかよはん。六帖

○此歌は古今戀三に出て。四句。そこに通ふとあり。古今にては。底に其。鴉鳥の氷の下を行通ふ如く。人目にかよりなどせぬやうに。いとひそかに通はんゆめくさるけしきを。人に知らずる事なかれとなり。上句は序にて。つれもなくは。氷の下を通ふ故に。上へは。さも見えぬよしなり。此詞は。序のうへのみにて。歌の意には。あづからずと。鈴屋大人遠鏡いはれたり。にほ鳥は。和名抄。鷓鴣和名。野鳥小而好没水中也。有俗にカイツブリといふものなり。

うばたまのよるのみふれる白雪はてる月かげのつたまる、六帖もるなりけり

○意明らかかなり。夜のみふれるといふにつきて。月影の積るなるよといへるが此歌のたくみなる所なり。

この月の年のあまりにたあらざらばうぐひすははやなきそめて、一本そしなまし

○此歌は十二月に閏月の有けるによめるにて。此月は閏十二月なり。年のあまりにたつとは。十二月ジラニツキの一年に餘りて。閏月のあるよしなり。立つとは。月の来るをいふ。一うたの意は。此閏月のなくは。はや正月なるべければ。鶯は鳴べきものをとよめるなり。抄の説非なり。三句。た真らざらばとある本も誤なり。と鈴屋大人真いはれたり。此歌六帖に閏月の題に載たり。三句は。不立者タラズなり。かくて。抄本には。た真らざらばと有て。甕麻呂云。こは有餘と不足とをたよかはせたるにて。意は。此閏十二月がジラニツキ十二月の閏リヒトツキ。三十日に不足は。今月タラズ二月ニツキは。はやく正月なれば。鶯ははや云々と云意と見んも然るべきさまなりといへり。

關こゆるみちならなくにはなしに近ながら年にさはりて春をまつみの、一本かな

○年にさはりてとは。一夜隔ても。いまだ春ならぬをいふなり。いと近き所にて。も關

の隔あれば。それにさへらるゝが如く。一夜にても。今年と來年とのへだてあるにさはりて。春を待つことかなとなり。

みくしげ殿の別當に。年をへていひわたり侍けるをえ

あはずして。其年のしはすのつごもりの日。つかはしけ

る。六傳○御櫛匣殿は。御服を司る所にて。上臈の女房を別當とするよし。拾芥抄等に見

えたり。此時の別當は。清慎公の女なるよし。大和物語に見えたり。

藤原敦忠朝臣

物おもふもふご過る月日のゆくも。大和物語月日もも。異又一本しらぬまにかきる、一本こごしなりける哉、又の一本はけふはてぬごにかきく

○物思ふとは。物思ふごとてなり。え逢はぬ事をのみ思ひて。うつ／＼として。月日の過
行事をもしらで居つる間に。年は暮果ては。や今日一日になりしと。かきけり。さては。
いつまでかくのみ嘆くべき事ぞ。となり。末句は。てぬごかきく。とあるにて。物思ひ
にのみほれたるさま。あはれに聞ゆるなり。大和物語には。右の歌につづけて。となん

有ける又かくなん。いかにしてかく思ふてふ事を。だに人つてならで。君にかたらん。
此歌は。下戀かきいひく／＼て。つひにあひにけるあしたに。けふそへにくれざらめや
五に出たり。はと思へども。たへぬは人の心なりけり。此歌も。下戀四に出てとあり。

210
41

後撰和歌集卷第八新抄

終

終

藤原教忠朝臣

三十一
一

| |
|-----|
| 210 |
| 41 |

1000-1000
1000-1000
1000-1000

